

史跡 教王護国寺境内・平安京跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一六―九

史跡 教王護国寺境内・平安京跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

史跡 教王護国寺境内・平安京跡

2017年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、駐車場トイレ改修工事に伴う史跡 教王護国寺境内・平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成29年3月

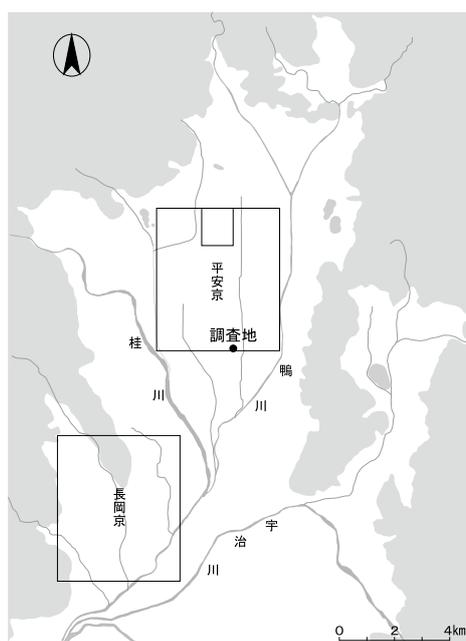
公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡 教王護国寺境内・平安京跡
- 2 調査所在地 京都市南区九条町1番地
- 3 委 託 者 宗教法人 教王護国寺 代表役員 砂原秀輝
- 4 調査期間 2016年8月23日～2016年10月17日
- 5 調査面積 56.6㎡
- 6 調査担当者 山下大輝・東 洋一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「梅小路」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 山下大輝
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。

(調査地点図)



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	2
2. 位置と環境	3
(1) 位置と環境	3
(2) 周辺調査	3
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 平安時代の遺構	7
(3) 鎌倉時代から室町時代の遺構	11
(4) 江戸時代から近代の遺構	13
4. 遺 物	19
(1) 遺物の概要	19
(2) 土器類	19
(3) 瓦類	21
(4) 瓦埴	24
(5) 石製品	26
(6) 金属製品	26
5. ま と め	27
(1) 平安時代	27
(2) 鎌倉時代から室町時代	27
(3) 江戸時代以降	27

図 版 目 次

図版1	遺構	1	第1面全景（南西から）
		2	土坑26遺物出土状況（南西から）
		3	石列124、暗渠134検出状況（北西から）
図版2	遺構	1	第2面全景（西から）
		2	カマド75検出状況（北西から）

- 図版3 遺構 1 カマド75断面状況（北西から）
 2 カマド75焚口掘り下げ状況（北東から）
- 図版4 遺構 1 前庭部74上面検出状況（北東から）
 2 前庭部74下層断割状況（南から）
 3 カマド75、前庭部74検出状況（南から）
- 図版5 遺構 1 第3面全景（南東から）
 2 溝114完掘状況（南東から）
- 図版6 遺物 土坑26出土土器類
- 図版7 遺物 軒丸瓦
- 図版8 遺物 軒平瓦・瓦塼

挿 図 目 次

図1	既往の調査地及び伽藍復元図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	調査前全景（南から）	2
図4	作業風景	2
図5	調査区西壁・北壁断面図（1：60）	8
図6	第3面平面図（1：100）	9
図7	第2面平面図（1：100）	10
図8	土坑107・108実測図（1：50）	11
図9	カマド75・前庭部74・土坑133実測図（1：40）	12
図10	第1面平面図（1：100）	14
図11	柵200・201実測図（1：80）	15
図12	礎石建物100実測図（1：120）	16
図13	井戸128実測図（1：50）	17
図14	石列124断割部分実測図（1：30）	17
図15	土器類実測図（1：4）	20
図16	軒丸瓦拓影及び実測図（1：4）	22
図17	軒平瓦拓影及び実測図（1：4）	23
図18	瓦塼・石製品・金属製品実測図（瓦塼は1：6、他は1：4）	25
図19	「東寺境内図」（江戸時代）	28
図20	「東寺境内一覽図」（明治28年）	29

表 目 次

表 1	周辺調査一覧表	4
表 2	遺構概要表	7
表 3	遺物概要表	19

史跡 教王護国寺境内・平安京跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

京都市南区九条町1番地に所在する教王護国寺は、敷地内において駐車場トイレ改修工事を計画した。これを受け、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「保護課」という）は、当地が史跡 教王護国寺境内及び平安京跡にあたることから発掘調査実施を指導した。

発掘調査は、宗教法人教王護国寺から公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託され、保護課の指導により実施した。

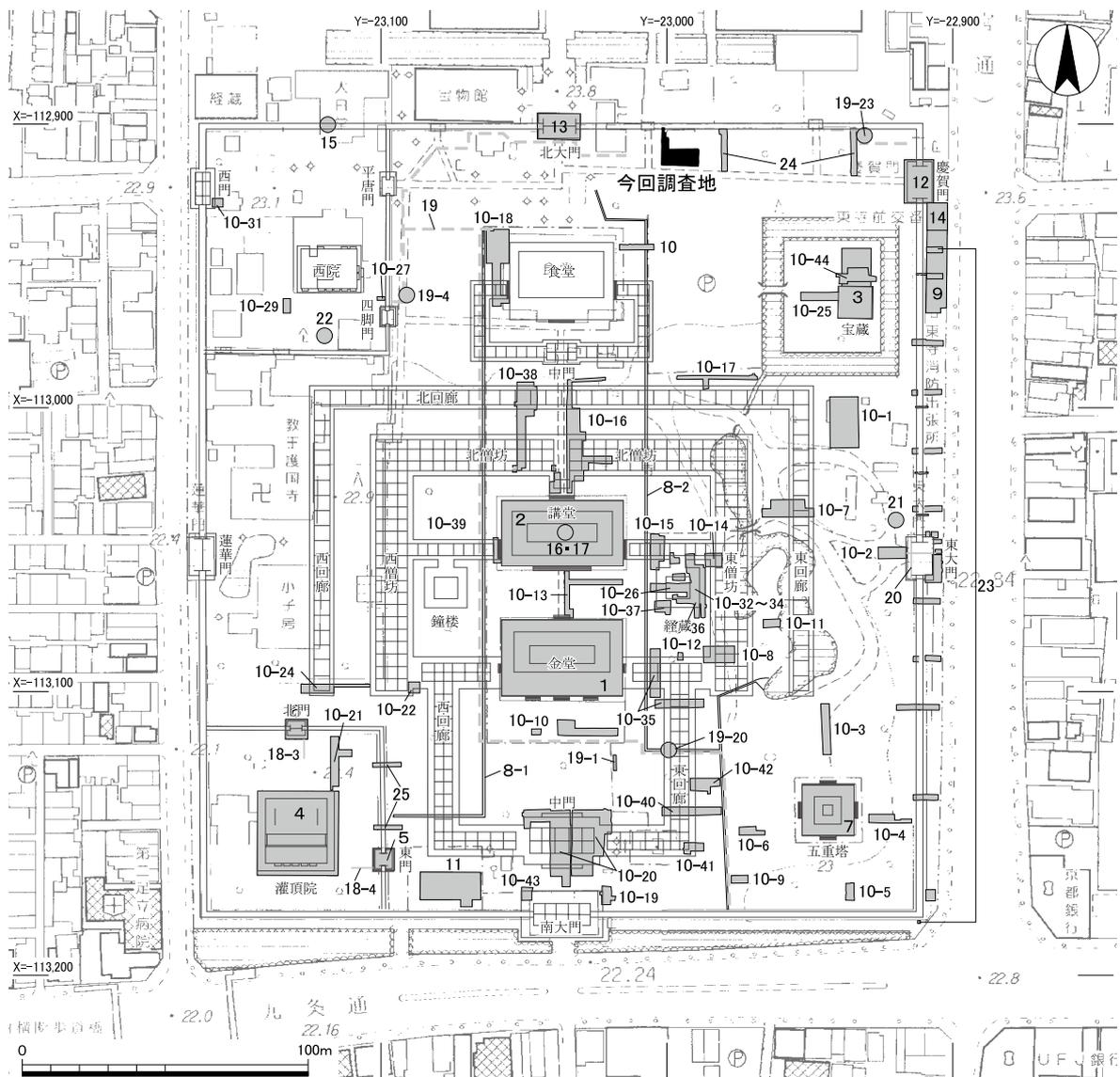


図1 既往の調査地及び伽藍復元図（1：2,500）

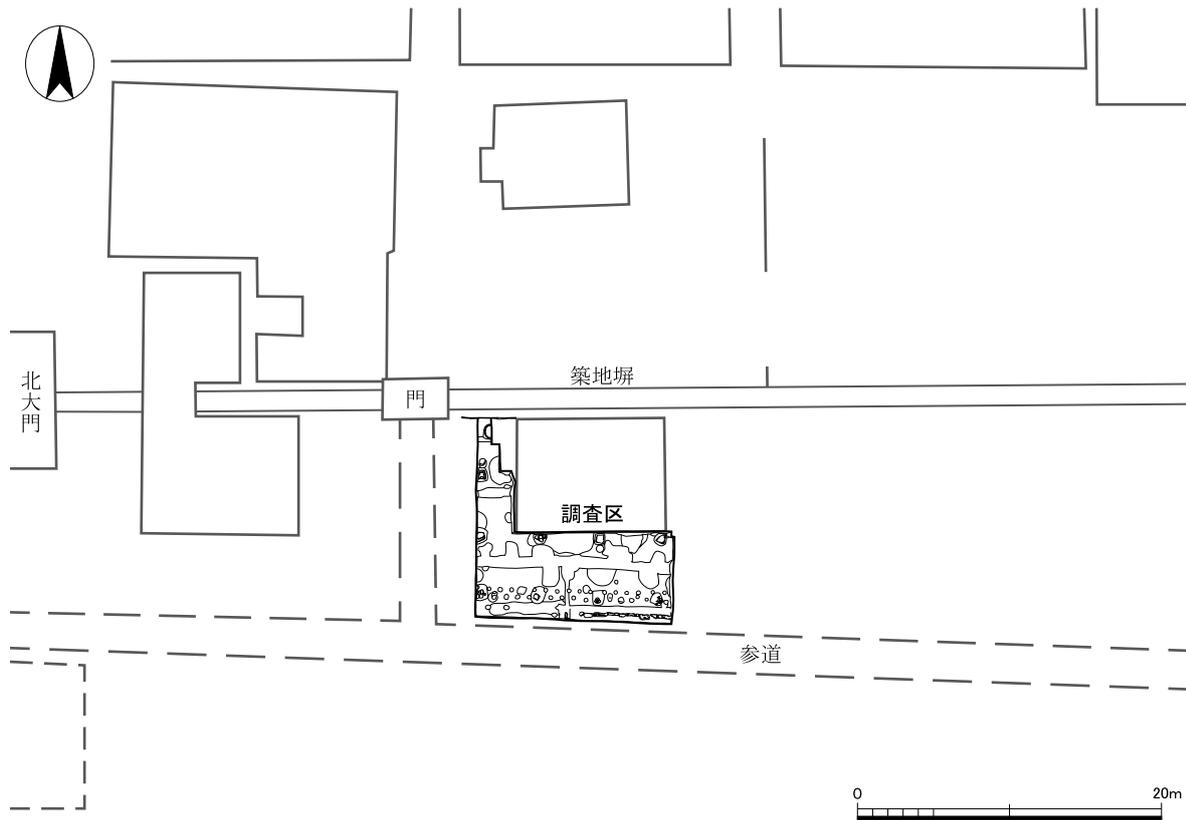


図2 調査区配置図（1：500）

発掘調査の目的は、既往の周辺調査成果から考え、東寺・平安京跡に関する遺構の確認と堆積状況、及び当地の変遷を明らかにすることである。

（2）調査の経過

調査区は、保護課の指導により駐車場トイレの南西側に設定した（図2）。発掘調査は現代盛土を重機掘削で除去した後、人力掘削により実施した。調査は3面の遺構面で行った。遺構面及び地山面を検出し、近代の礎石建物、江戸時代の石列や土坑、鎌倉時代から室町時代のカマド、それに伴う前庭部を検出した。また、平安時代の北築地塀の基底部、築地塀に伴う内溝を検出した。写真撮影及び平面・断面実測を実施し記録作成を行った。なお、第3面調査は、第1面で検出した石



図3 調査前全景（南から）



図4 作業風景

列、第2面で検出したカマド、前庭部、整地層の遺構保存が必要との指導を受け、調査区全体のうち一部のみを調査した。

発掘調査は2016年8月23日から開始し、2016年10月17日に作業を終了した。調査中に、保護課の指導を随時受けた。

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

東寺旧境内は平安京左京九条一坊九町から十六町の8町域を占める。北は八条大路、東は大宮大路、南は九条大路、西は壬生大路に囲まれる。主要伽藍はその内の南側4町に配置され、北4町には造営当初は東寺の経営を支えた花園院・倉垣院・大衆院・政所院があったと推測されている。鎌倉時代末期には境内北半部に大小の子院が建てられ始めた。境内南半部は中世以降、伽藍を構成する主要建物が度重なる地震や火災などによって失われたため、再建が繰り返され、現在南半の伽藍には創建当初から残る建物は存在しない。しかし、伽藍配置は維持され続け、金堂や講堂の位置や規模は当初からのものを踏襲していると考えられている。

また、北半の旧境内地は、その半分が洛南中学・高等学校や保育園、民家となっているが、櫛笥小路に面して子院が建ち並ぶ中世からの景観を留めている。

(2) 周辺調査（図1、表1）

調査地周辺では、これまで多くの発掘調査や試掘・立会調査が実施された。ここでは主要な調査成果について別表にまとめた。表にまとめたもののうち、今回の調査に直接的に関連するものとしては、平成26年度の発掘調査（調査24）が挙げられる。この調査では北築地塀の基底部、平安時代の溝、近世の土坑・石列・路面などを検出し、北築地塀とそれに伴う内溝は平安時代中期までには存在していたとの見解が示されている。

表1 周辺調査一覧表

番号	調査地	調査方法	調査期間 調査機関	調査面積	主な遺構	主な遺物	備考	文献
1	金堂	解体修理 発掘	1936～1940年 京都府教育庁文化財 保護課	約612㎡	平安の基壇・礎石、時 期不明の須弥壇・敷 壇	-	創建期の基壇などを検出。 軒廊地覆石を確認。敷壇 は北側に遺存。礎石40基 のうち出柄・柱座ありが 34基、柱座のみが6基。	1
2	講堂	解体修理 発掘	1950～1953年 京都府教育庁文化財 保護課	約1032㎡	平安前期の基壇(地覆 石・階段耳石)・礎石・ 須弥壇(地覆石・狭間 石・束石)・敷壇	平安の軒瓦・鬼瓦、 中世の埴、室町 の軒瓦	創建期の基壇を検出。軒 廊の地覆石などを確認。 礎石44基のうち出柄・柱 座ありが30基、柱座のみ が14基。須弥壇基壇内は 瓦積み。狭間石は凝灰岩。	1
3	宝蔵・ 大師堂	解体修理 発掘	1954.4.1～1955.12.31 京都府教育庁文化財 保護課	約338㎡	平安の礎石(現宝蔵、 旧宝蔵)・根固石	平安の緑釉軒平瓦、 平安・鎌倉の軒瓦	現宝蔵礎石は16基。	2
4	灌頂院	解体修理 発掘	1965.1.1～1969.3.31 京都府教育庁文化財 保護課	約770㎡	平安の礎石・禊石(根 固石)・狭間石・基壇 版築土	平安～近世の軒丸 瓦・軒平瓦・凝灰 岩片・土器	鎌倉再建時に礎石を動か す。礎石52基、他に柱の 立たない礎石2基。52基 中8基は柱座なし、その 他焼損・破損のため加工 不明瞭が13基。	3
5	灌頂院 東門	解体修理 発掘	1965.1.1～1969.3.31 京都府教育庁文化財 保護課	約42㎡	平安の礎石・禊石(根 固石)	中世の瓦・土器・ 凝灰岩片	礎石は動かされていない。 唐居敷石は寛永年間の修 理。扉軸摺穴に平安と中 世のものを確認。	3
6	灌頂院 北門	解体修理 発掘	1965.1.1～1969.3.31 京都府教育庁文化財 保護課	約30㎡	平安の唐居敷石・禊石 (根固石)・石列	中世の瓦・土器・ 凝灰岩片	扉軸摺穴に平安と中世の ものを確認。	3
7	五重塔	解体修理 発掘	1959.4.1～1960.12.31 京都府教育庁文化財 保護課	約324㎡	江戸の基壇	平安の軒丸瓦・軒 平瓦	寛永再建時の壇上積方形 基壇、壇上四半石敷、材 質は花崗岩。基壇葛石よ り約1.3m下に多量の木炭 と瓦片を確認。	4
8	伽藍 (中心建物 東西両脇)	立会	1962.9.4 鳥羽離宮跡調査 研究所		平安の金堂東軒廊基壇 両側地覆石・講堂東軒 廊基壇南地覆石		金堂東軒廊幅11.6mと確 認。講堂東軒廊は7m以 上。版築土による基壇造 成。僧房跡は確認できて いない。	5
9	東築地塀 大行	発掘	1972.1.24～2.5 財団法人古代学協会	北トレ:約16㎡ 南トレ:約31㎡	平安前期の築地版築土 ・築地塀寄柱東礎石、 江戸の堀・杭跡	平安～近世の土器 ・瓦、近世の金属 製品	創建時の塀の位置は現在 とほとんど変わっていない。 創建時の堀(側溝?) は壊されていると推定。	6
10	伽藍	発掘 (防災)	1977.12～1981.4 近畿大学理工学部 建築学科	44箇所	2地点:平安の溝、室 町の石組側溝、3～6 地点:江戸初以前の焼 土、17地点周辺:近世 ～近代の石組溝、10地 点:中世の参道、8・ 13地点:平安の金堂北 階段地覆石、室町の瓦 溜り、31地点:時期不 明の西築地石組溝、8 ・12・15地点など:平 安の凝灰岩製延石・地 覆石など、20地点:室 町の抜取穴、44地点: 平安の礎石	平安～近世の土器 ・瓦・金属製品、 平安の石製品(石 帯)	金堂や講堂の回廊・軒廊、 経蔵、中門などの主要遺 構を確認。	7
11	八幡宮	発掘	1988.10.24～12.27 財団法人京都市埋蔵 文化財研究所	168㎡	平安の築地基底部・柱 穴・溝・土坑、鎌倉の 亀腹基壇・礎石・柱穴 ・溝・土坑、室町の建 物跡・柱穴・溝・土坑、 近世～近代の土坑	平安～室町の土器 ・瓦	鎌倉の八幡宮社殿跡、室 町の社殿跡を検出。	8
12	慶賀門	解体修理 発掘	1989.8.31～1994.6.30 京都府教育委員会	約150㎡	鎌倉前期の礎石・根固 石・基壇化粧石・土坑	平安前期の土器、 平安後期の土器・ 瓦、鎌倉前期の土 器、鎌倉前期～近 世の瓦	12基の礎石のうち7基は 出柄および柱座がある。 花崗岩製。礎石は創建時 に寄せ集められたものか。	9
13	北大門	解体修理 発掘	1989.8.31～1994.6.30 京都府教育委員会	約150㎡	平安の築地塀基底部・ 礎石抜取穴・地鎮遺構	平安～中世の土器 ・瓦	礎石は12基ですべて柱座 がある。	9

番号	調査地	調査方法	調査期間 調査機関	調査面積	主な遺構	主な遺物	備考	文献
14	東築地塀 犬行	発掘	1992.6.10～7.15 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	約40㎡	鎌倉前期の溝・築地裾部盛土、近世の堀・溝・杭跡	平安～近世の土器・瓦	鎌倉前期及び近世の溝は0.1mと浅く、各時期の築地塀雨落溝と推定。堀幅が南で0.8mほど西へ拡張。	10
15	北築地塀	試掘	1997.8.13 京都市文化市民局文化財保護課		表土直下で北築地塀跡		江戸中期頃の版築土を確認。	11
16	講堂 須弥壇	確認調査	1998.7.6～8.19 財団法人京都市埋蔵文化財研究所	11㎡	江戸の突き棒痕・土坑	江戸の土器・瓦・金属製品		12
17	講堂 須弥壇	確認調査	2000.1.17～1.25 財団法人京都市埋蔵文化財研究所	6.5㎡	平安の基壇版築土・須弥壇版築土・土坑・護摩跡土坑、室町の再建須弥壇版築土、安土桃山の須弥壇化粧土	平安の土器・瓦・緑釉瓦・銭貨・焼土(壁土・瓦下地)	創建期の講堂基壇、須弥壇版築土、護摩跡などを検出。文明18年の焼土及びその後の須弥壇版築土、安土桃山の化粧土を検出。平安の杭跡は割付杭。	13
18	伽藍・ 観智院・ 灌頂院	防災立会	2009.3.10～3.24 財団法人京都市埋蔵文化財研究所	10㎡	観智院：近世の土坑、中世の土坑または整地層、灌頂院：平安～中世の整地層	平安の瓦、鎌倉～江戸の土器・瓦	観智院創建当初とみられる整地層、灌頂院再建とみられる瓦大量の整地層。	—
19	伽藍 立会 (防災)	発掘・ 立会	2009.11.9～12.9 財団法人京都市埋蔵文化財研究所	発掘：約5.5m (1箇所) 立会：約530m	平安の金堂東軒廊地覆石(20地点)、平安後期の土坑(23地点)、鎌倉の瓦層(1トレンチ)、近世～近代の整地層・瓦敷(4地点)	平安の土器・瓦、鎌倉の土器・瓦、江戸の土器・金属製品	出土瓦は大半が播磨産、文覚上人修造のもので、瓦溜めは焼失や再興に伴う。金堂東軒廊地覆石(凝灰岩)を検出。	14
20	東大門 基壇	発掘	2011.1.11～1.28 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	20㎡	慶長期以前の基壇版築土、江戸～近代の基壇盛土、江戸後期の土坑、瓦集中部	平安～江戸の土器、中世・江戸の瓦	基壇は4回修復されていたことを確認、1回目：慶長10年以前、2回目：慶長10年頃まで、3回目：江戸後半、4回目：昭和、大半の礎石は慶長期修理で据えなおす。	15
21	伽藍	立会	2013.3.19～3.22 財団法人京都市埋蔵文化財研究所		G L-0.35mまで現代盛土			16
22	伽藍	立会	2013.10.22 京都市文化市民局文化財保護課		上面から-0.05mで容器蓋、同-0.15mで埋土、同-0.45mで容器底	須弥壇内仏像などの埋納物および容器(甕・播鉢の転用)	願海建立(江戸末期)「仏頂尊勝陀羅尼碑」修復に伴う須弥壇内調査。	17
23	東築地塀 及び 東大門 基壇東面	発掘・ 試掘	1次：2010.10.13～12.17	1～8トレンチ 155㎡	平安～安土桃山の築地版築土、平安～現代の整地層、中世・江戸前期の礎敷、中世以降の柱穴など	平安～江戸の土器・瓦・金属製品・石製品など	東築地塀は9世紀初頭以降に造られた、築地心は平安～現代までほとんど動かされていない、江戸前期以降の総構の堀を検出、平安～江戸の東大門東面基壇を確認。	18
			2次：2012.1.16～3.14	9～12トレンチ 10㎡				
			3次 試掘：2012.4.16～4.26 発掘：2012.7.9～10.30	13～19トレンチ 62㎡				
			4次：2014.2.17～3.31 財団法人・公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	20～23トレンチ 37㎡				
24	北築地塀	発掘	2015.2.23～3.23 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	68㎡	平安の築地基底部・溝、中世の積み土、近世の土坑・石列・路面、近代の路面・暗渠・礎石・土坑・井戸・ピット・瓦溜	平安の土器・瓦、中世の土器・瓦、江戸以降の土器・瓦・煙管・銭貨		—
25	灌頂院 東築地	発掘	2016.1.25～2.19 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	約30㎡	平安前期～後期の築地塀跡・整地層・溝・土坑、鎌倉～室町の整地層・土坑、江戸前期の築地塀・整地層・地業・ピット、江戸後期の路面、土坑、近代の路面・土坑・瓦溜	平安の土器・瓦、鎌倉～室町の土器・瓦、江戸以降の土器・瓦・銭貨	灌頂院の竣工時期が9世紀前半になる可能性を確認。灌頂院の現東築地塀は土塀であった可能性が高いことを確認。	—

文献一覧（表1 周辺調査一覧表）

- 1 『重要文化財教王護国寺講堂修理工事報告書』 京都府教育庁文化財保護課 1954年
- 2 『重要文化財教王護国寺宝蔵・太師堂修理工事報告書』 京都府教育庁文化財保護課 1960年
- 3 『重要文化財教王護国寺灌頂院並北門・東門修理工事報告書』 京都府教育庁文化財保護課 1960年
- 4 『国宝教王護国寺五重塔修理工事報告書』 京都府教育庁文化財保護課 1960年
- 5 『史跡西寺跡』 鳥羽離宮跡調査研究所 1979年
- 6 「東寺東側築地外発掘調査報告」『古代文化』27-1 財団法人古代学協会 1975年
- 7 近畿大学理工学部建築学科杉山研究室「東寺境内発掘調査概報」『教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書』 教王護国寺 1981年
- 8 上村和直「平安京左京九条一坊・東寺旧境内1」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 9 『国宝教王護国寺蓮花門・重要文化財教王護国寺北大門・慶賀門・北総門修理工事報告書』 京都府教育委員会 1995年
- 10 引原茂治「史跡教王護国寺」『京都府遺跡調査概報』第48冊 財団法人京都市埋蔵文化財調査研究センター 1992年
- 11 『京都市内遺跡試掘調査概報 平成9年度』 京都市文化市民局 1998年
- 12 鈴木久男「東寺講堂須弥壇」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 13 平尾政幸「東寺講堂須弥壇」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 14 近藤章子『教王護国寺旧境内』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-13 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 15 伊野近富「基壇内部の発掘調査」『重要文化財教王護国寺東大門ほか三棟修理工事報告書』 京都府教育委員会 2013年
- 16 『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成25年度』 京都市文化市民局 2014年
- 17 堀 大輔「平安京左京九条一坊十一町跡・史跡教王護国寺境内（13HL417）」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成25年度』 京都市文化市民局 2014年
- 18 近藤奈央「基壇東辺部の発掘調査」『重要文化財教王護国寺東大門ほか三棟修理工事報告書』 京都府教育委員会 2013年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図5)

層序は地点によって異なるため、調査区西壁を基準として述べる。地表面から0.04mまでが現代盛土である。その下に0.06mの厚さで近代整地層が堆積する。さらにその下に0.24mの厚さで近世整地層が堆積する。土に締まりはなく、場所によっては多量の土器類・瓦類が含まれていた。その下に0.12～0.16mの厚さで黒褐色細砂、にぶい黄褐色細砂、灰黄褐色シルトが堆積する中世整地層がある。整地層中には多量の瓦類が含まれていた。そして、その下は固く締まった黄褐色シルトからなる地山となる。

調査は、各整地層または地山面の上面で、第1面（江戸時代から近代）、第2面（鎌倉時代から室町時代）、第3面（平安時代）として調査を行った。

(2) 平安時代の遺構 (図6、図版5)

築地基底部136 調査区北西部で検出した。検出面での規模は東西約0.8m、南北0.5mである。基底部は現北築地塀の下部へと延長する。平断面の観察から、地山と判断することができ、北築地塀の基底部は地山面を削り出して構築している。

溝114 (図5、図版5) 調査区北西部で検出した東西方向に延びる溝。溝の東西両側ともに調査区外へと延長する。検出面での規模は、幅1.44m、深さ0.48mである。平成26年度調査で検出した北築地内溝の延長上に位置する。溝の断面形態は逆台形状を呈する。溝中央から北築地塀裾の化粧石までの距離は1.9mである。埋土は灰黄褐色シルトで、非常に固く締まっていた。埋土からは土師器、瓦器、緑釉瓦、瓦類が少量出土した。

また、溝114の北側には断面観察から深さ0.45mの落ち込みを確認した(図5－西壁51層)。埋土は、非常に固く締まるにぶい黄褐色シルトで地山の土に近い。遺物は出土しない。このため溝114を構築する際の整地と考えられるが、溝114の前身の溝である可能性もある。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	溝114、築地基底部136	
鎌倉時代～室町時代	カマド75、前庭部74、柱穴96・98・105、土坑101・102・106～109・115・132・133	
江戸時代～近代	礎石建物100、井戸128、石列124、タタキ125、暗渠134、柵135、土坑26・32・91・129～131、柵200・201	

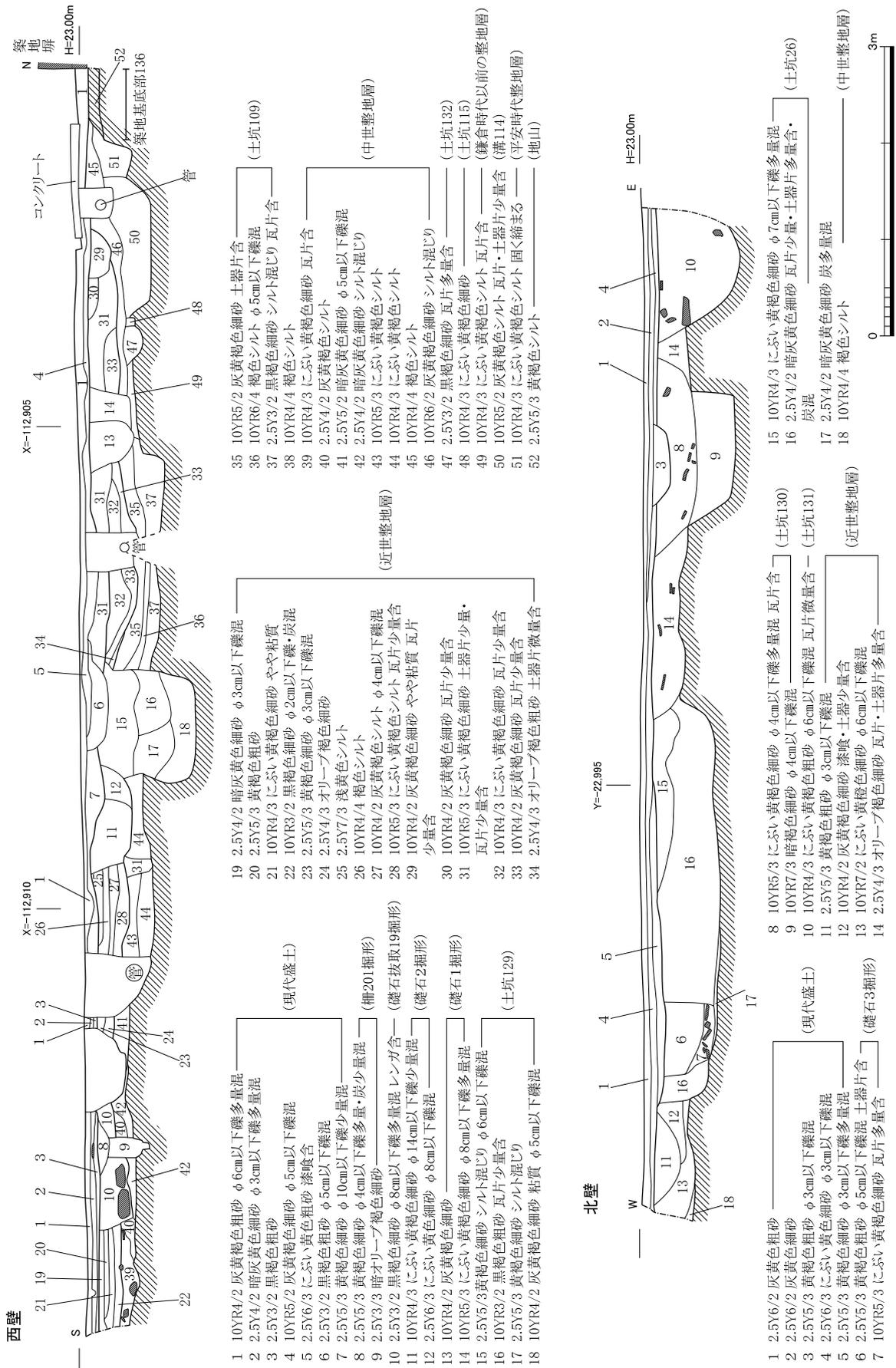
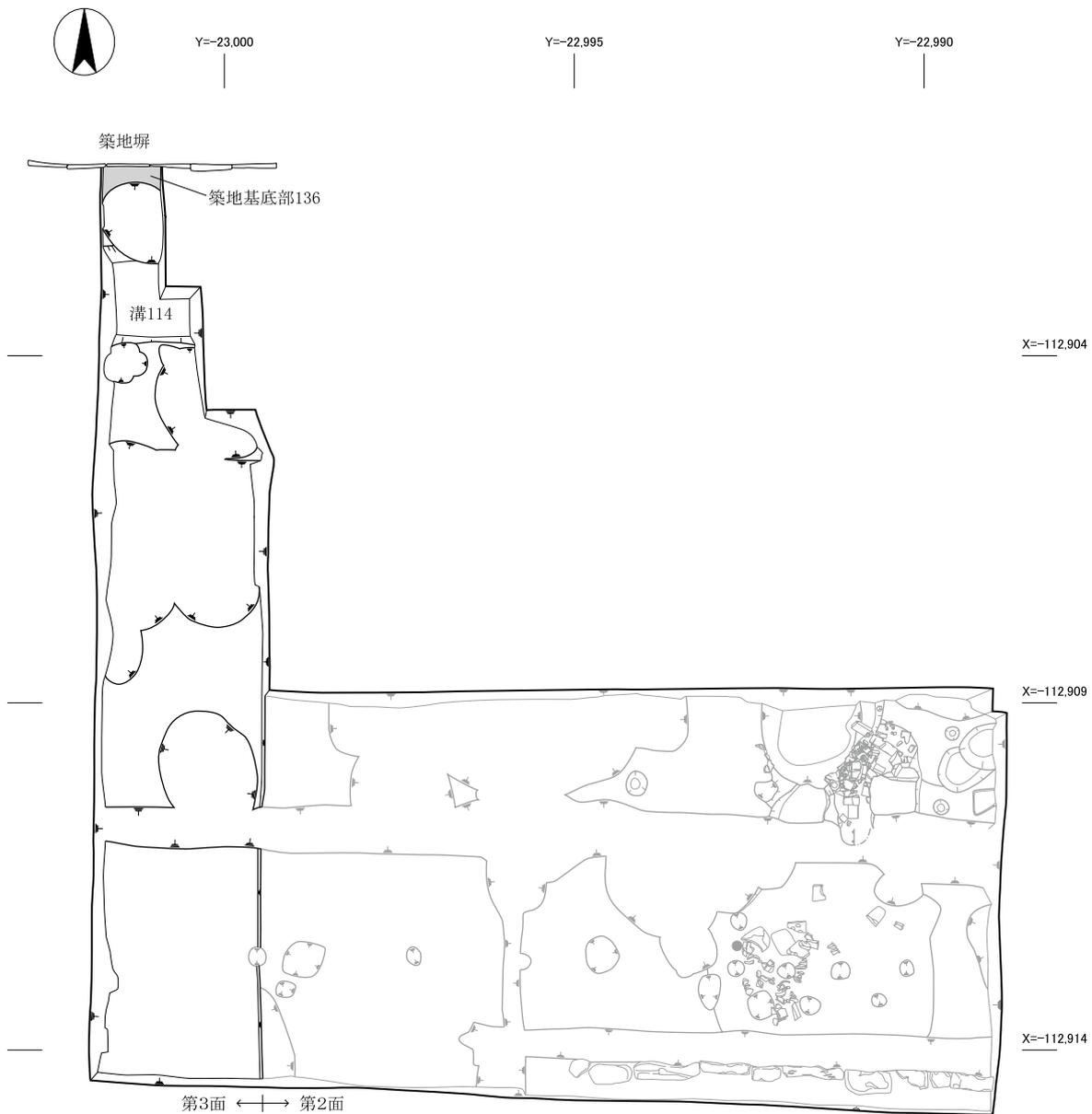


図5 遺跡区西壁・北壁断面図 (1:60)



■ 築地基底部



图6 第3面平面图 (1 : 100)

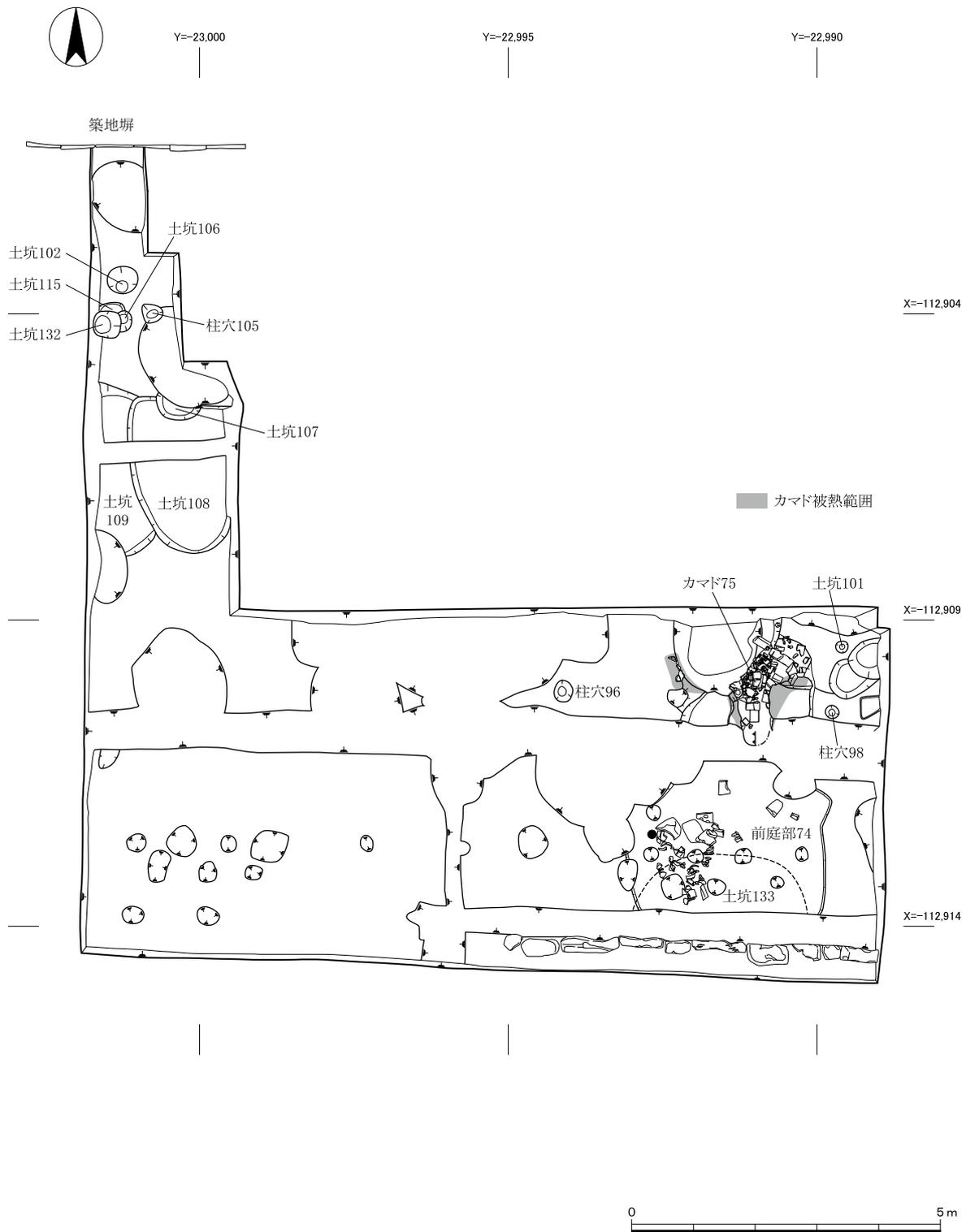


図7 第2面平面図 (1 : 100)

(3) 鎌倉時代から室町時代の遺構 (図7、図版2)

柱穴96 調査区中央部で検出した。検出面での規模は径0.28m、深さ0.12mである。掘形は円形を呈する。掘形中央に径約0.16mの柱当たりを確認した。埋土は2層に分かれ、柱当たりには褐色シルト、掘形ににぶい黄褐色シルトが堆積する。埋土から遺物は出土していない。

柱穴98 調査区東部で検出した。検出面での規模は径0.26m、深さ0.14mである。掘形は円形を呈する。掘形中央に径0.12mの柱当たりを確認した。埋土は2層に分かれ、柱当たりには灰黄褐色シルト、掘形ににぶい黄褐色シルトが堆積する。埋土からの遺物は出土していない。

土坑101 調査区北東部で検出した。検出面での規模は径0.2m、深さ0.12mである。平面形は円形を呈する。埋土は2層に分かれ1層に黄褐色細砂、2層に褐色シルトが堆積する。

土坑102 調査区北西部で検出した。検出面での規模は径0.5m、深さ0.2mである。平面形は円形を呈する。埋土から中世の瓦片が少量出土した。

柱穴105 調査区北西部で検出した。検出面での規模は径0.26m、深さ0.28mである。掘形は円形を呈する。掘形中央に径0.12mの柱当たりを確認した。埋土は2層に分かれ、柱当たりには灰黄褐色細砂、掘形に0.06m以下の礫が少量混じる暗灰黄色細砂が堆積する。埋土からは土器片が少量出土した。

土坑106 調査区北西部で検出した。検出面での規模は径0.35m、深さ0.1mである。平面形は楕円形を呈する。埋土は灰黄褐色細砂が堆積する。土坑115を切り込んで成立する。

土坑107 (図8) 調査区北西部で検出した。検出面での規模は径0.78m、深さ0.18mである。埋土はやや暗灰黄色細砂で、瓦片が少量出土した。後述する土坑108を切り込んで成立する。

土坑108 (図8) 調査区北西部で検出した。検出面での規模は、径1.58m以上、深さ0.22mである。東側は調査区外へ延長する。埋土は上下2層に分かれ上層に灰黄褐色シルト混じり細砂が0.12m、下層にやや粘質な灰黄褐色粗砂が0.10m堆積する。埋土からは瓦塼や瓦片が出土した。

土坑109 調査区北西部で検出した。検出面での規模は、径2.4m以上、深さ0.3mである。南側は攪乱される。埋土は上下2層に分かれる。上層は0.05m以下の礫が混じる褐色シルトが0.06m堆積し、下層は黒褐色シルト混じりの細砂が0.24m堆積する。下層から鎌倉時代、室町時代の瓦片が多量に出土した。

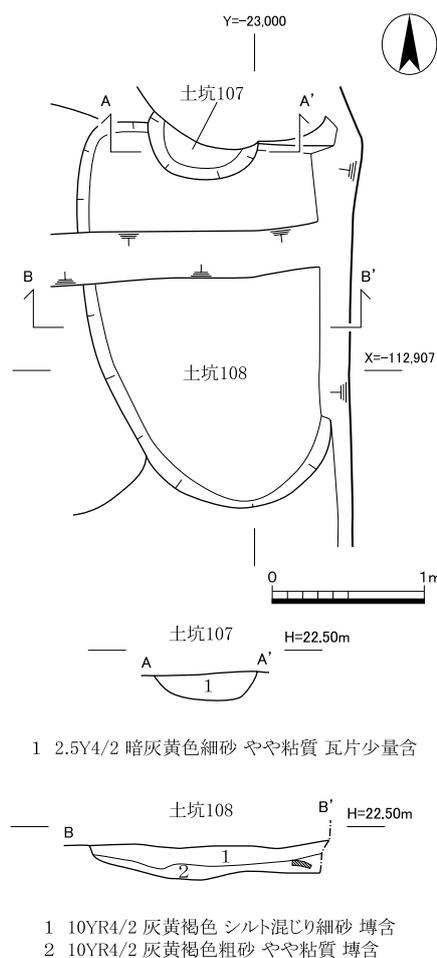
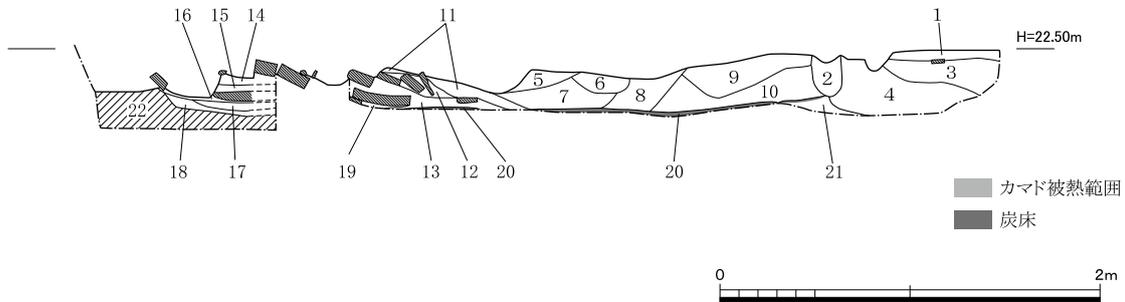
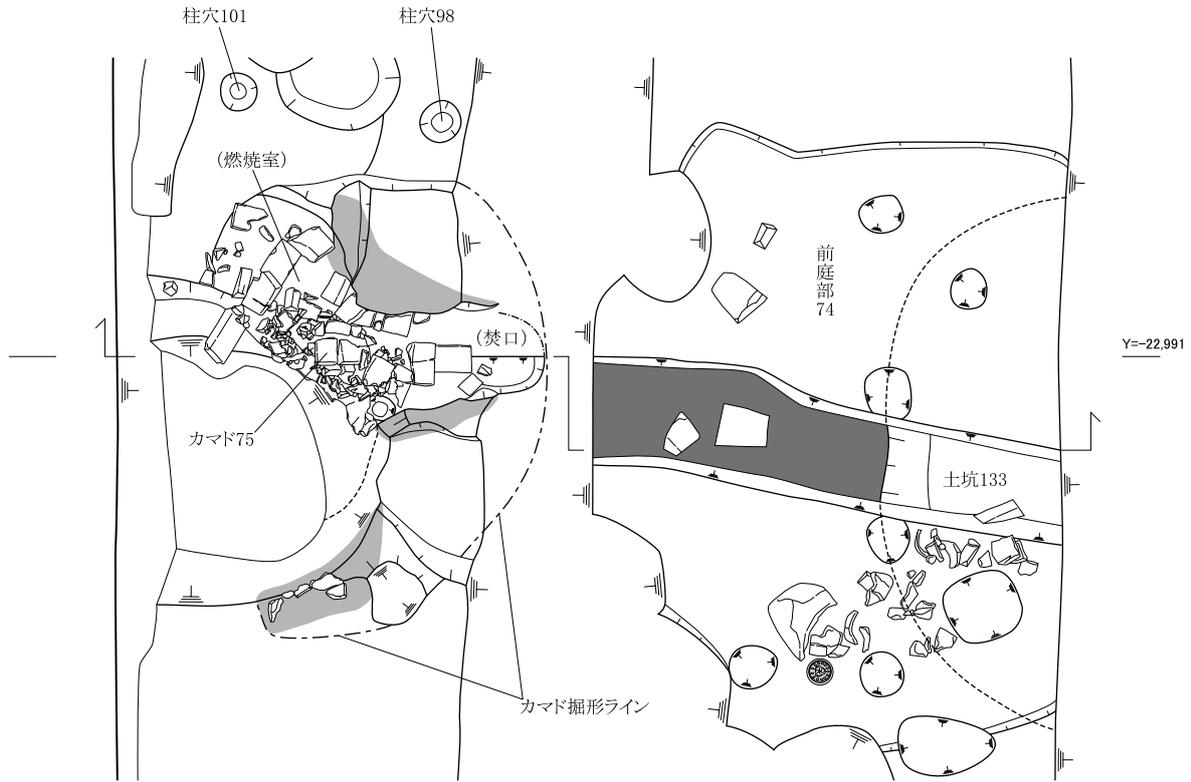


図8 土坑107・108実測図 (1 : 50)



X=-112.910



- | | |
|---|---|
| 1 10YR4/2 灰黄色 シルト混じり細砂
φ1cm礫混 瓦含 (中世整地層) | 11 7.5YR4/4 褐色 焼土混じり砂泥 砂中量含 軟らかい |
| 2 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト混じり細砂
瓦少量含 φ2cm礫少量混 (柵201) | 12 7.5YR5/6 明褐色焼土 砂泥混じり やや締まる |
| 3 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂 シルト混じり
瓦多量含 (土坑133) | 13 7.5YR5/8 明褐色焼土 シルト混じり砂少量混
固く締まる |
| 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 炭少量混 | 14 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト混じり細砂
焼土混じり 炭微量含 (カマド75崩壊土) |
| 5 10YR5/2 灰黄褐色 シルト混じり細砂 (埋め土) | 15 10YR3/3 暗褐色 シルト混じり細砂 やや粘質
焼土混じり 炭中量含 |
| 6 2.5Y5/3 黄褐色 シルト混じり細砂 埴含 | 16 10YR2/2 黒褐色 シルト混じり細砂 粘質土 炭多量含 |
| 7 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト φ3cm以下礫少量混 | 17 10YR3/3 暗褐色 シルト混じり砂泥 砂中量含 (カマド75構築土) |
| 8 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト 土器片少量含 | 18 10YR3/2 黒褐色 砂混じり粘質土 土器少量含 |
| 9 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト混じり細砂 瓦少量混 | 19 10YR3/2 黒褐色粘質土 (前庭部74床面) |
| 10 10YR4/4 褐色シルト 土器微量含 炭少量混 | 20 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 炭少量含 |
| | 21 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト (前庭部74床面構築土) |
| | 22 2.5Y4/2 暗灰黄色 シルト混じり砂土 (地山) |

図9 カマド75・前庭部74・土坑133実測図 (1:40)

土坑115 調査区北西部で検出した。検出面での規模は、径0.4m、深さ0.15mである。平面形は円形を呈すると考えられる。埋土は黒褐色細砂が堆積する。瓦片が出土した。

土坑132 調査区北東部で検出した。検出面での規模は、径0.4m、深さ0.2mである。平面形は円形を呈する。埋土は黒褐色細砂が堆積する。埋土から瓦片が出土した。土坑106・115を切り込んで成立する。

カマド75(図9、図版2～4) 調査区東部で検出した。南側に焚口が開くカマドである。燃烧室の西半は近世の土坑130で攪乱される。東半は遺構保存のため、掘り下げは行わなかった。検出面での規模は、掘形の南北長は約1.35m以上、東西長は約1.3m以上、深さは最深で0.3mである。焚口は幅0.51～0.6m、長さ0.55m以上である。燃烧室は約0.9m以上、南北約0.75m以上である。平面形は、円形だと考えられる。焚口と併せて考えると、フラスコ状を呈すると考えられる。断面観察の結果、地山を掘り込んで床土として炭と粘質土を貼っていることがわかる(17・18層)。また焚口付近から燃烧室にかけて非常に固く焼け締まっている。その上にはカマドの壁、天井部からの崩落土が堆積する(11～16層)。この崩落土からは多量の瓦罫が出土した。出土した瓦罫は、カマド構築土が付着する個体が少なく、カマド廃絶に伴って廃棄されたものと思われる。ただし、二次焼成を受けた個体も存在し、カマド構築材の可能性も否定することはできない。

前庭部74(図9、図版4) カマド75の南側に広がる前庭部である。検出面での規模は、南北約2.46m以上、東西約3.2mである。部分的に行った断割の断面観察から下層でカマド75の焚口から連続する炭層を確認した(20・21層)。遺物は鎌倉時代から室町時代の軒瓦、瓦罫が出土した。

土坑133(図9) 調査区南東部で検出した。前庭部74の部分的に行った断割で、炭層を切り込んだ土坑133を確認した。検出面での規模は南北0.88m以上、深さ0.28m以上である。平面形は円形を呈すると思われる。埋土は2層に分かれ、上層はシルト混じりのにぶい黄褐色細砂、下層はオリーブ褐色シルトが堆積する。遺物は室町時代の瓦器鍋、土師器羽釜、軒瓦などが出土した。

(4) 江戸時代から近代の遺構(図10、図版1)

土坑26(図版1) 調査区中央部で検出した。検出面での規模は南北1.4m以上、東西4.4m、深さ0.65mである。平面形は長方形を呈すると思われる。埋土はにぶい黄褐色細砂と暗灰黄色細砂が堆積する。埋土中から近世以降の土器類、瓦類が多量に出土した。

土坑32 調査区東部で検出した。検出面での規模は径1.9m、深さ約0.29mである。平面形は円形を呈する。埋土から近世以降の染付、瓦類などが出土した。

土坑129 調査区西部で検出した。検出面での規模は径1.0m以上、深さ約0.9mである。平面形は円形を呈する。埋土は4層に分かれ、上から礫を多量に含んだ黄褐色細砂、黒褐色粗砂、黄褐色細砂、灰黄褐色細砂が堆積する。埋土からは近世以降の土器類が出土した。

土坑130 調査区北東部で検出した。検出面での規模は径1.7m、深さ0.8mである。平面形は円形を呈する。埋土は2層に分かれ、にぶい黄褐色細砂と暗褐色細砂が堆積する。埋土から近世以降の施釉陶器などが多量に出土した。

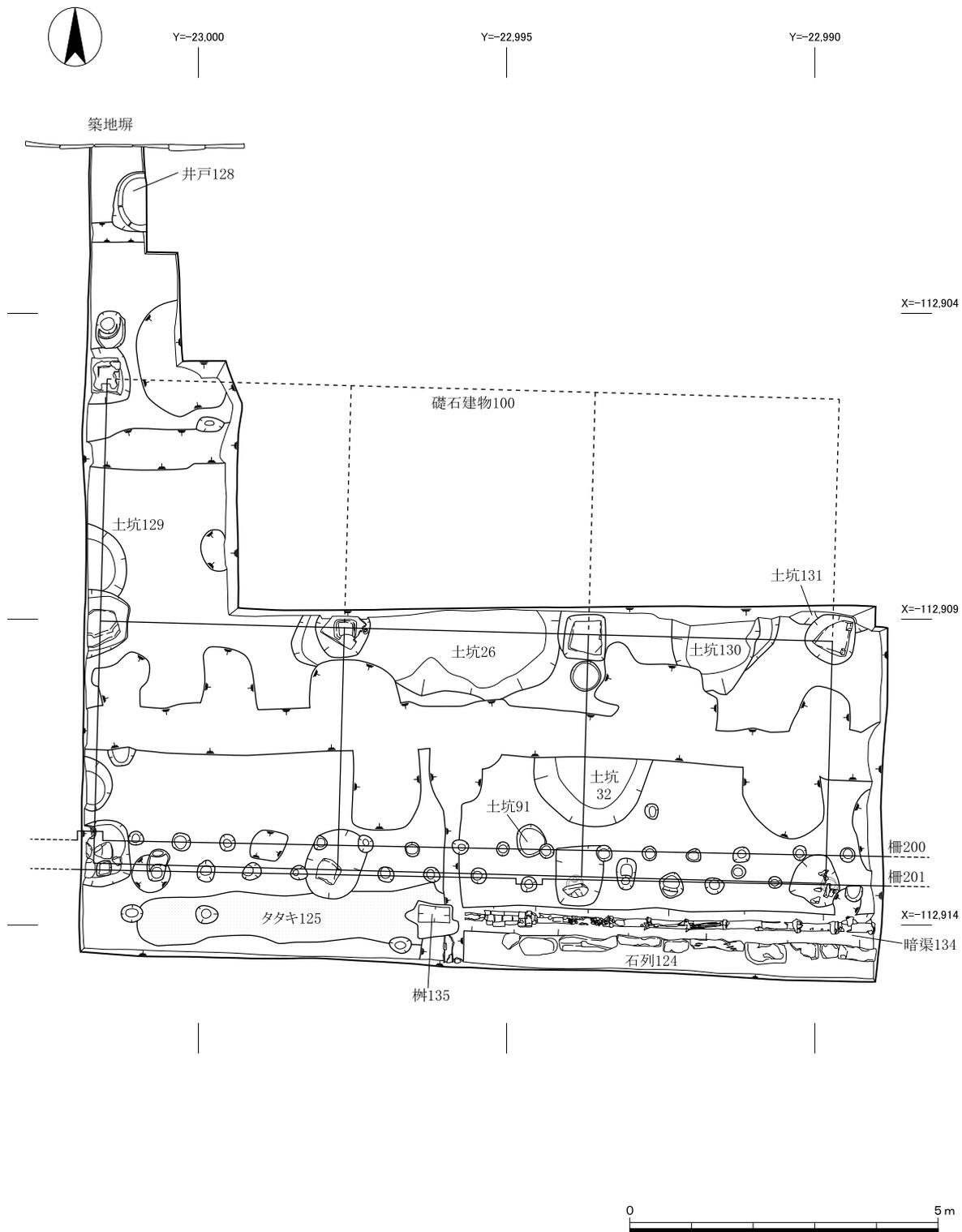


図10 第1面平面図 (1 : 100)

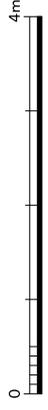
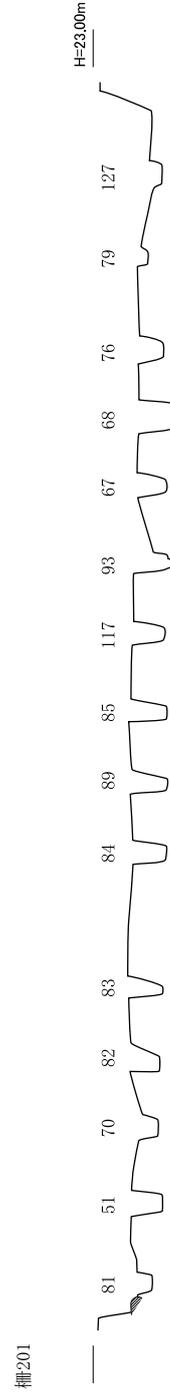
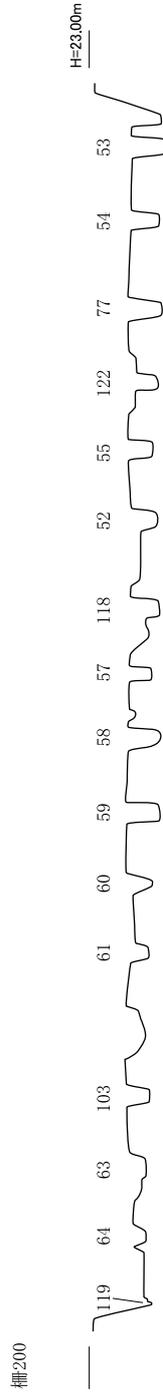
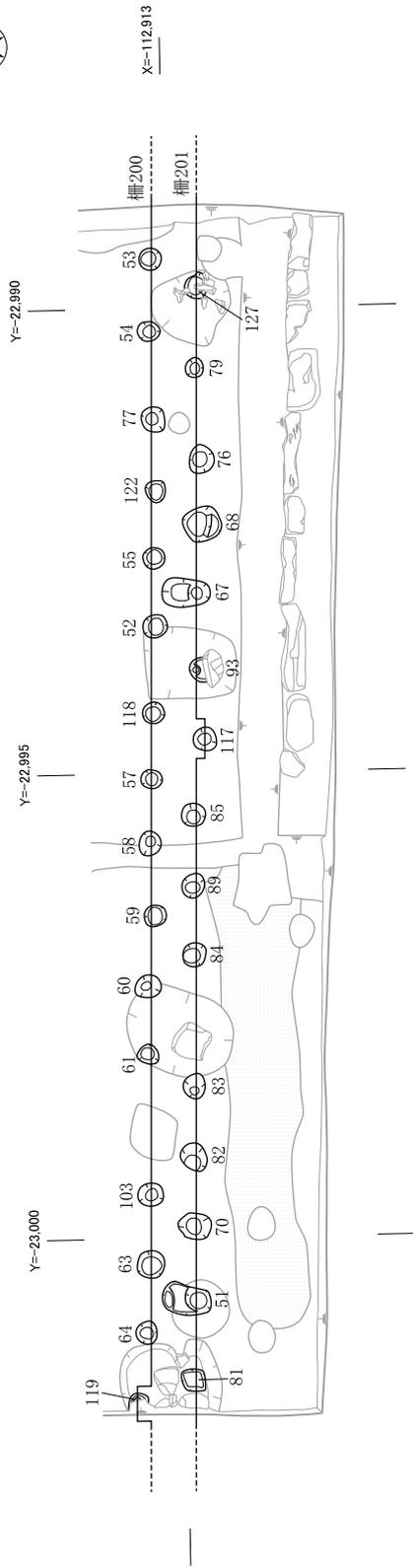


图11 栅200·201实测图 (1 : 80)

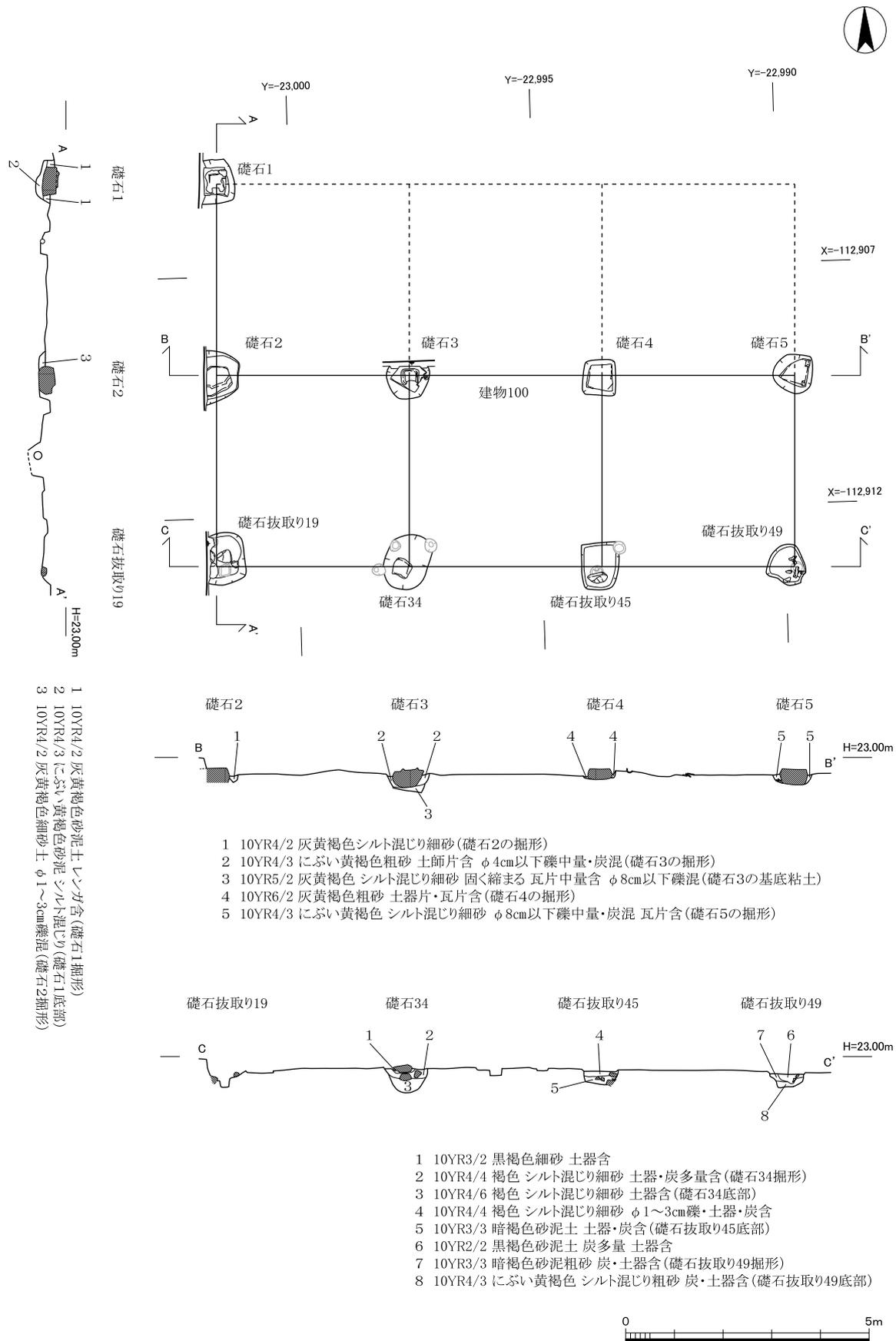


図12 礎石建物100実測図 (1:120)

土坑131 調査区北東部で検出した。検出面での規模は東西約1.3m以上、深さ約0.85mである。埋土はにぶい黄褐色粗砂が堆積する。埋土から近世以降の瓦などが出土した。

柵200 (図11) 調査区南部で検出した。検出面での規模は、東西長約12.5mで、柱間は約0.75mである。柱穴の掘形は径0.2～0.36mで、深さ0.14～0.36mである。掘形は円形を呈する。この柵を構成する柱穴の一部が礎石建物100の掘形を切り込んでいる。埋土から陶器製土管片などが出土した。

柵201 (図11) 柵200の約0.5m南で検出した。検出面での規模は、東西約11.0mで、柱間は約0.75mである。柱穴の掘形は径0.2～0.3mで、深さ0.1～0.4mである。掘形は円形を呈する。この柵を構成する柱穴の一部は礎石建物100の掘形を切り込んでいる。埋土から染付などが出土した。

礎石建物100 (図12) 調査区全体で検出した礎石建物跡で、礎石1～5・34、礎石抜き取り19・45・49で構成される。柱間は梁行・桁行ともに約4mで、南北2間×東西3間である。近代の茶所の建物跡と考えられる。各礎石掘形の検出面での規模は、径0.74～0.94m、深さ0.2～0.5mで、方形もしくは楕円形を呈する。

特に礎石1・3には礎石上面にモルタルが付着しており、建物の補修痕とみられる。また、礎石1の掘形埋土からは煉瓦が出土した。

井戸128 (図13) 調査区北西部で検出した。検出面での規模は径0.95m、深さ0.75m以上で、掘形は円形を呈する。安全を考慮する上で、深さ0.75m以下の掘り下げは行わなかった。井戸側は厚さ約0.1mの漆喰で形成される。埋土からは近世以降の土器類、近代のガラス片などが出土した。

土坑91 調査区中央部で検出した。検出面での規模は径約0.5m、深さ0.15mで、平面形は円形を呈する。埋土は3層に分かれ、上からやや粘質な黒褐色粗砂、にぶい黄褐色細砂、シルト混じりの灰黄褐色細砂が堆積する。土器片が出土した。

石列124 (図14、図版1) 調査区南東部で検出した。東西方向へ延びる石列である。石列の東

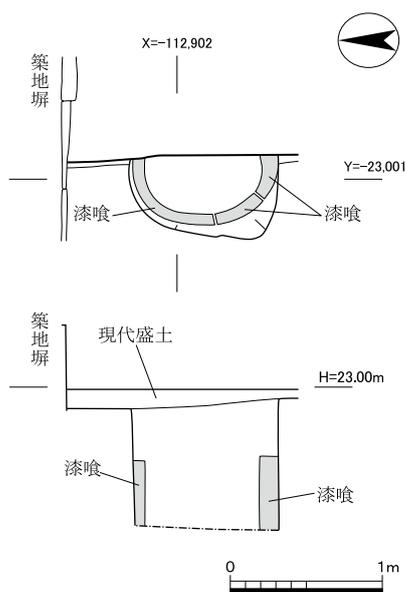


図13 井戸128実測図 (1:50)

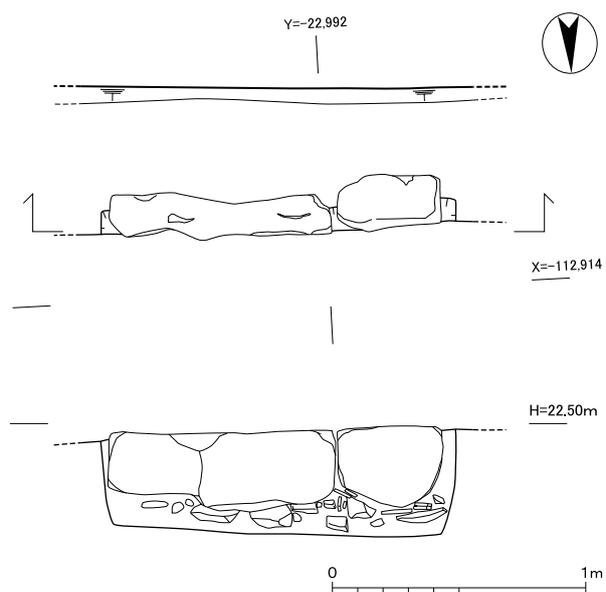


図14 石列124断割部分実測図 (1:30)

側は調査区外へと延長する。検出面での規模は東西6.0m、南北0.2mである。石の材質はすべて花崗岩で、風化が顕著に確認できるものとそうでないものがあり、加工痕がみられる転用石も確認することができる。断割を行った部分で検出した石の寸法は、長さ約1.3m、幅約0.2m、厚さ約0.3mで、扁平な石を立てて使用している。また、石列の下からは、人面大から拳大ほどの礫や瓦片を検出した。これは石の沈下を抑制するためのものであると考えられる。石列以南の整地面が固く締まっていることや慶賀門から延びる参道と検出した石列が平行関係にあることから、参道縁石と思われるが、石の大きさからは異なる機能も考慮すべきと思われる。

タタキ125 調査区南西部で検出した。東西方向に延びる。検出面での規模は、東西長約5.0m、南北幅0.8～1.0mである。細かい砂礫が敷かれ固く締まっている。検出位置が礎石建物100を構成する礎石抜取り19・45間であり、この礎石抜取り19・45間が建物出入口と想定した場合、土間であると考えられる。そのためタタキ125は礎石建物に付随するものであると考えられる。

暗渠134 (図版1) 調査区南東部で検出した。東西方向に延び、西は後述する柵135に接続していたと思われ、東延長部は調査区外へと延びる。検出面での規模は東西約6.7m、南北約0.5m、深さ約0.24mである。陶製土管が敷設された暗渠で、一部煉瓦による補修痕もみられる。また暗渠は、柵135に接続し、そこから陶製土管がほとんど残存してはいるが、南北方向へと掘形が伸びる。この検出位置が礎石建物100の中央にあたることから、礎石建物100に関連する施設である可能性が高い。

柵135 調査区南部で検出した。検出面での規模は南北0.52m、東西0.73m、深さ0.45mである。柵は四方が厚さ0.02～0.2mの漆喰で塗り固められている。埋土からは近世以降の瓦片が出土した。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、整理用コンテナに76箱である。出土遺物には土器類・瓦類・ガラス製品・土製品・石製品・金属製品・木製品などの種類がある。そのうち瓦類が大半を占め、次いで陶磁器類、他の遺物は少ない。時代別では、安土桃山時代から江戸時代中期までの瓦類が多く、次に江戸時代後期から明治時代にかけては瓦類・土器類が多い。室町時代以前の遺物は出土したが、全体比率としては少ない。

平安時代の遺物は、溝114から土師器、瓦器、瓦類が出土した。

鎌倉時代から室町時代の遺物は、土坑101・107・108、中世整地層などから出土した。土器類には土師器皿・羽釜、瓦器鍋、瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。

江戸時代後期から明治時代の遺物は、礎石建物100、柵200・201、土坑26から出土した。

(2) 土器類 (図15、図版6)

平安時代

溝114出土土器 1は土師器皿である。いわゆる「て」の字状口縁の皿である。京都Ⅲ期中段階に属する。¹⁾ 2は瓦器椀である。内外面ともにミガキが密に施されるが、全体に磨滅しており不明瞭である。12世紀に属する。

中世整地層出土土器 3は土師器高杯の脚部である。七角形を呈し、ケズリによって成形される。混入で出土した。

鎌倉時代から室町時代

土坑101出土土器 須恵器が出土した。4は東播系須恵器の鉢である。口縁部の一部に自然釉が付着する。京都Ⅵ期新段階に属する。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク掲載遺物点数	Aランク未掲載箱数	B・Cランク箱数
平安時代	土師器、瓦器、瓦類		土師器2点、瓦器1点、軒丸瓦2点、軒平瓦4点：9点		
鎌倉時代～室町時代	土師器、須恵器、瓦器、瓦類、瓦埴		土師器4点、須恵器1点、瓦器2点、軒丸瓦7点、軒平瓦5点、瓦埴7点：26点		
江戸時代～近代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付、瓦類、煉瓦、ガラス製品、土製品、石製品、金属製品		土師器41点、施釉陶器6点、軒丸瓦3点、軒平瓦2点、石製品1点、金属製品1点：54点		
合計		80箱	89点(4箱)	76箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、掲載遺物を抽出したため、出土時より4箱多くなっている。

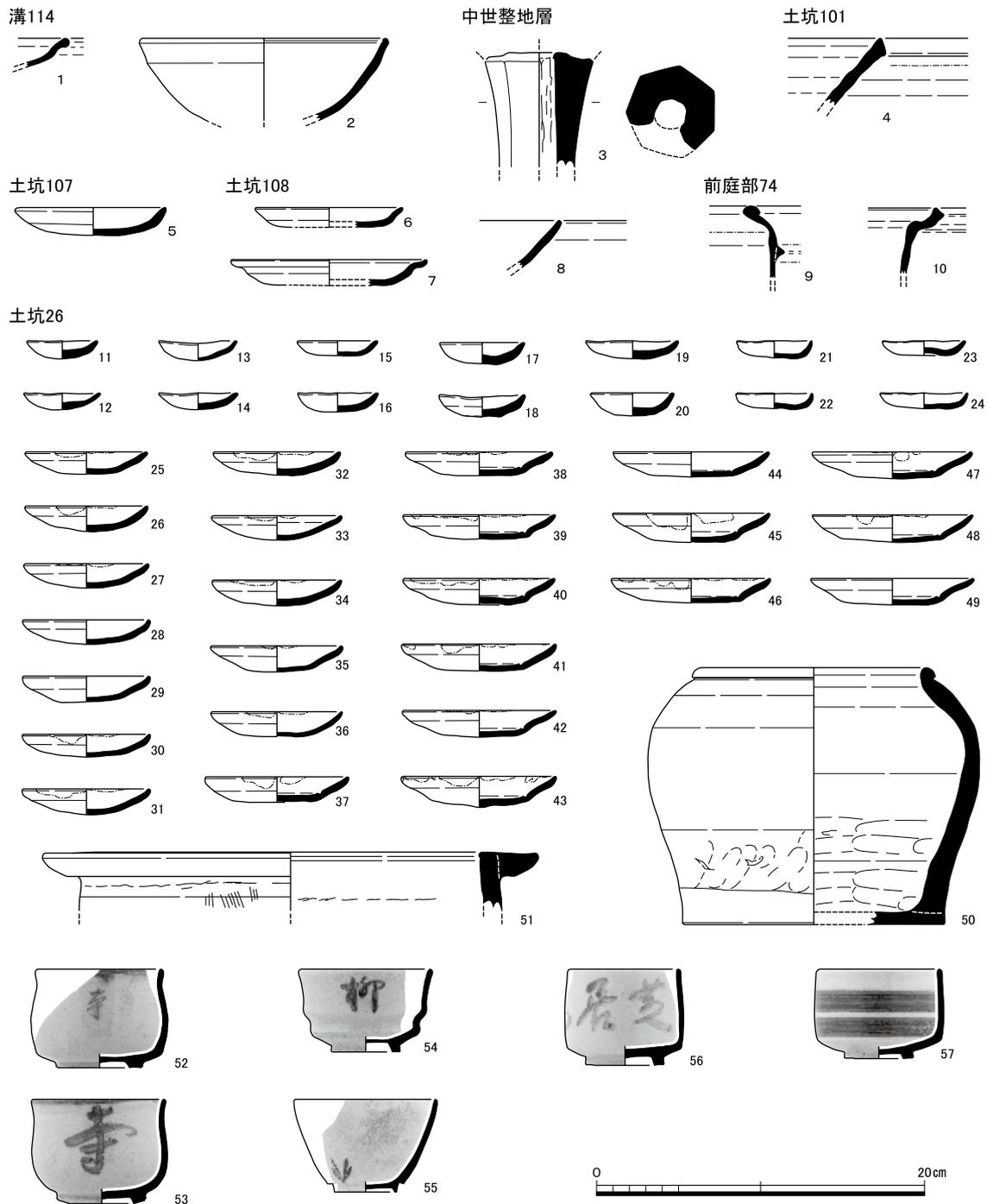


図15 土器類実測図（1：4）

土坑107出土土器 5は土師器皿である。内面と外面体部に横方向のナデを施す。京都Ⅶ期古段階に属する。

土坑108出土土器 6・7は土師器皿である。6は磨滅が著しい。口縁部は横方向のナデが施される。京都Ⅶ期古段階に属する。7はいわゆる「て」の字状口縁で、橙褐色を呈する。磨滅が著しい。8は瓦器椀である。灰白色を呈するが、口縁部は熱を受けて変色がみられ黄褐色を呈する。

前庭部74出土土器 9は土師器羽釜である。磨滅が著しいため調整は不明瞭であるが、鏝部は別の粘土を貼り付けている。また、内面の一部に横方向のナデが施される。10は瓦器の鍋である。

外面全体に煤が付着する。口縁部はナデが施される。これらの遺物は京都Ⅶ期に属する。

江戸時代

土坑26出土土器 土師器・焼締陶器・施釉陶器・瓦類などが出土した。11～24は小型の土師器皿である。口径は4.2～5.0cmのものである。手づくねによる成形で、指頭痕を顕著に確認することができる。このうち11・19・22・23は煤が付着している。京都Ⅶ期～Ⅷ期に属する。25～49は土師器皿である。口径は7.4～9.7cmのものである。このほとんどに煤が付着していることから灯明皿として使用されていたことがわかる。このうち37～49は内面底部に圏線が巡る。京都Ⅶ期～Ⅷ期に属する。50は土師器壺である。内外面ともに回転ナデによって仕上げられる。51は土師器羽釜である。口径は23.2cmである。口縁部に煤が付着する。ナデによって仕上げられ、鏝は貼り付けて成形する。

52～57は施釉陶器である。いずれも京信楽系である。52・53には「寺」、54には「柳」、56には「芝菩□」の銘がみられる。茶所で使用されたものであると考えられる。

(3) 瓦類 (図16・17、図版7・8)

軒丸瓦 (図16、図版7)

瓦1・2は平安時代である。瓦1は複弁八弁蓮華文軒平瓦である。中房は蓮子は1+5が配される。攪乱から出土した。瓦2は複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。中房は1+5が配される。前庭部74から出土した。

瓦3～8は鎌倉時代である。瓦3は複弁蓮華文軒丸瓦である。中房は蓮子が1+4であると考えられる。珠文は11個が残存する。珠文の内側に圏線を巡らせる。中世整地層から出土した。瓦4は左巻き三巴文軒丸瓦である。遺構検出中に出土した。瓦5は右巻き三巴文軒丸瓦である。巴の先端部が尖り、それぞれの尾が接し圏線状を呈する。遺構検出中に出土した。瓦6は右巻き三巴文軒丸瓦である。それぞれの巴の尾が結合し、圏線状を呈する。また珠文が2連・3連と単位ごとに配される。瓦当成形は貼り付け技法で丸瓦接合部は無加工である。焼成が甘く、浅黄橙色を呈する。前庭部74から出土した。瓦7は左巻き三巴文軒平瓦である。巴の先端部がやや尖る。珠文は24個を数える。瓦当成形は貼り付け技法で丸瓦接合部は無加工である。前庭部74から出土した。瓦8は左巻き三巴文軒丸瓦である。珠文は33個を数える。珠文の外側内側に圏線を巡らせる。瓦当成形は貼り付け技法で丸瓦接合部は無加工である。前庭部74から出土した。

瓦9は室町時代である。右巻き三巴文軒丸瓦で、珠文が配され6個が残存する。他の個体と比較してやや大振りであると考えられる。前庭部74から出土した。

瓦10～12は近世以降である。近世以降のものは巴文と輪宝文があり、菊丸瓦もある。瓦10は右巻き三巴文軒丸瓦である。巴の先端が丁寧な円形を呈する。珠文は16個、他の個体と比較して大きい。丸瓦凸面は縦方向にケズリが施される。燻されており非常に硬質である。攪乱から出土した。瓦11は八つ輪宝文軒丸瓦である。瓦当面外区外縁には面取りが施され、瓦当部下半分も丁寧にナデが施されている。また、瓦当面には雲母が多量に付着することから瓦範との剥離材だと考えられ

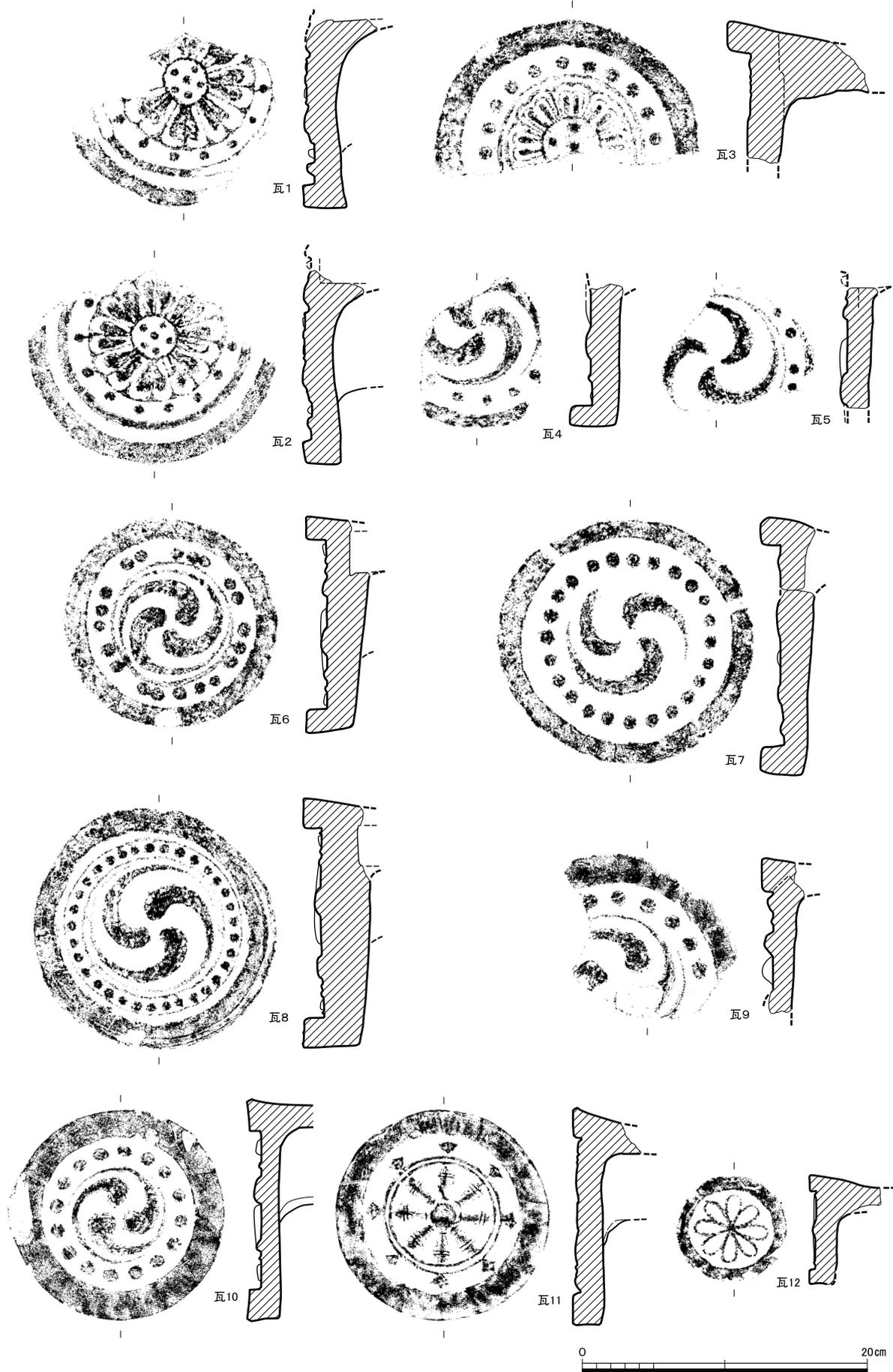


図16 軒丸瓦拓影及び実測図 (1 : 4)

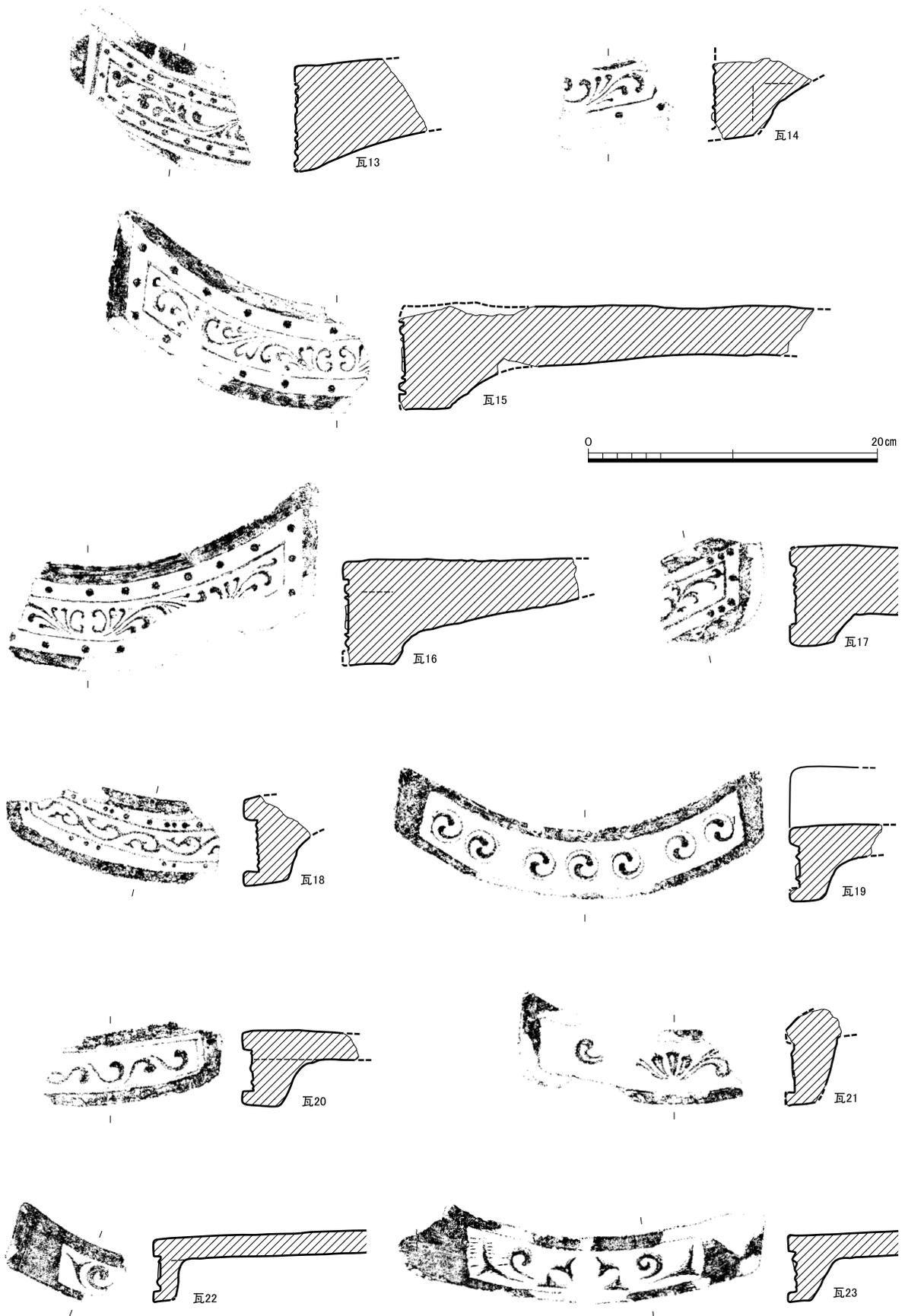


图17 軒平瓦拓影及び実測図 (1 : 4)

る。焼成は燻されており非常に硬質である。攪乱から出土した。瓦12は菊丸瓦である。八弁を配する。瓦当裏面は縁に沿ってナデが施される。攪乱から出土した。

軒平瓦（図17、図版8）

平安時代のものは瓦13で、唐草文軒平瓦である。同文例から中心飾りに「左寺」銘の軒平瓦であると考えられる。平瓦凹面には横方向のケズリが施され、平瓦凸面は不定方向にナデが施される。礎石建物100の礎石34から出土した。

鎌倉時代のものは瓦14～19である。瓦14は唐草文軒平瓦である。中心飾りが対向C字で3回反転する均整唐草文軒平瓦であると考えられる。第2面検出中に出土した。瓦15・16は中心飾りが対向C字で、3回反転する均整唐草文軒平瓦である。瓦当成形法は顎貼り付け技法である。平瓦凹面には布目痕が確認でき、平瓦凸面は縦方向のケズリを施す。また平瓦凹面には凸型成形台の圧痕が確認できる。瓦15は攪乱、瓦16は礎石建物100の礎石3から出土した。瓦17は唐草文軒平瓦である。珠文が3連・1連と単位ごとに配される。段顎で瓦当成形法は不明である。顎端面、顎裏面は横方向のナデ、平瓦凸面にもナデが施される。中世整地層から出土した。瓦18は偏行唐草文軒平瓦である。瓦当面左側から中央部までが残存する。『教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書』のNH58に類似する²⁾。瓦当成形法は不明瞭で確認できなかった。瓦当上外区外縁に面取りを施す。平瓦凹面には布目痕が確認でき、平瓦凸面には凹型成形台の圧痕が確認できる。攪乱からの出土である。瓦19は連巴文軒平瓦である。連巴の構成が2連・3連・2連と3単位に分かれる。瓦当部及び顎部に面取りはない。平瓦凹面には布目痕が確認できる。土坑109からの出土である。

室町時代のものは瓦20・21である。瓦20は4回反転する唐草文軒平瓦である。中心飾りは残存しない。瓦当成形法は顎貼り付け技法である。瓦当上外区外縁と顎端面後縁に面取りを施す。平瓦凹面部右側にヒレが付く。中世整地層から出土した。瓦21は2回反転する均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは三葉文である。瓦当成形法は顎貼り付け技法である。瓦当上外区外縁と顎端面後縁に面取りを施す。瓦当内区に雲母が多量に付着する。前庭部74から出土した。

近世以降のものは瓦22・23である。瓦22は唐草文軒平瓦である。中心飾りは残存しない。瓦当成形法は顎貼り付け技法である。瓦当部及び顎部に面取りはない。燻されており非常に硬質である。平瓦凸面部左側にヒレが付いている。近世整地層からの出土である。瓦23は均整唐草文軒平瓦である。中心飾りが花文である。内区両端で横筋状に范傷を確認することができる。瓦当成形法は顎貼り付け技法である。瓦当部及び顎部に面取りはない。燻されており非常に硬質である。平瓦凸面部には多量の雲母が付着することから成形台との剥離材と考えられる。攪乱からの出土である。

（4）瓦埴（図18、図版8）

埴1は一辺29.3cmの正方形を呈する。厚さは3.0cmである。表面にハナレ砂が付着することから型造りであると考えられる。土坑108からの出土である。埴2は最大長23.5cm・最大幅13.8cm以上・厚さ7.9cmの長方形を呈する。摩耗が著しいため調整が不明瞭であるが、側面には横筋状の工具痕がみられる。前庭部74から出土した。埴3は最大長31.1cm・最大幅15.5cm・厚さ5.5cmの長方

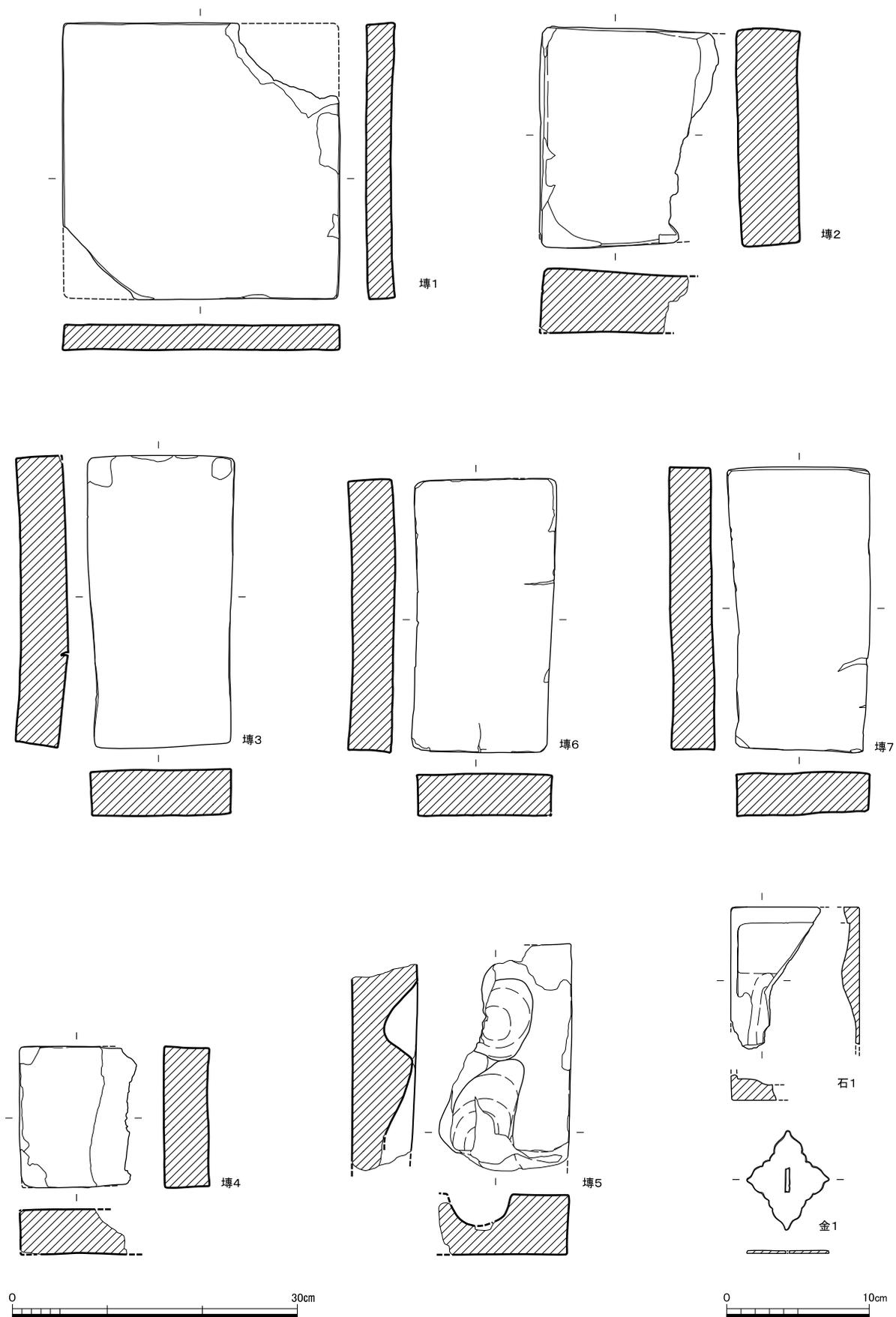


図18 瓦罏・石製品・金属製品実測図（瓦罏は1：6、他は1：4）

5. ま と め

(1) 平安時代

今回の調査では、北築地基底部、それに伴う東西溝（溝114）を検出した。これに関連したものとしては、平成26年度調査（図1・表1－調査24）で検出した北築地の基底部と考えられる高まりと、それに伴う内溝がある。今回検出した東西溝は、平成26年度調査で検出した溝の西延長部に位置することから一連の遺構であると考えられる。溝は、埋土から出土した12世紀の瓦器椀から、そのころには廃絶したと考えられる。

また、北築地塀の基底部は地山を削り出して構築されていることが今回の調査で明らかになったが、この基底部と東西溝との間に固く締まる整地土を確認した（図5－西壁51層）。部分的な検出で詳細は不明であるが、遺構の可能性もある。遺物が出土しなかったため時期の特定には至らなかったが、遺物の混入がない盛土と考えると創建期に近い時期の造成と評価してもよいと考えられ、溝114の成立時期もこれに近いものと考えられる。

平成26年度調査成果と今回の調査成果から、東寺創建当初から東寺境内を区画する北築地塀とその内溝が造成されていたと考えることができる。また内溝からの瓦の出土数はわずかであることから、創建期における築地塀は現在のような瓦葺きではなく、上土塀であった可能性が高いと考えられる。

(2) 鎌倉時代から室町時代

北築地塀とそれに伴う内溝以南から調査区南限までにおいて土坑を複数検出した。これらのうち土坑108・109については、粘質土を掘り込み下層の砂層で底面となることから土取り穴だと考えられる。土坑の埋土からは鎌倉時代、室町時代の焼け瓦が多く出土しており、文明18年（1486）の土一揆による境内焼亡と翌年から始まった復興に伴うものと考えられる。また、鎌倉時代もしくは室町時代のカマドとその前庭部を検出した。後世の攪乱で燃烧室の西半部は残存していなかったが、東西約1.3m以上と規模としては大きい。厨房などに関連する施設が絵図などで示されていない地点で検出されたことにより、中世における東寺伽藍中枢部の様相を考える上で重要な発見となった。

(3) 江戸時代以降

茶所の南端礎石列から南に約1.0mの地点で東西方向に延びる石列を検出した。この石列は現在の慶賀門から延びる東西参道と平行関係にあることから前代の参道北側縁石であると考えられる。

礎石建物100は、その検出位置などから、明治28年（1895）に作成された銅版画『東寺境内一覽図』（図20）に描かれている茶所の建物跡と考えられる。史料上、茶所はその造営年代は不明確であるが、昭和7年（1932）に作成された図面にはその存在が示されている。調査で検出したのは柱

間が梁行・桁行ともに約4mの南北2間×東西3間の礎石建物で、建物跡北西部には漆喰で内部を構築した井戸（井戸128）を検出している。今回の発掘調査で茶所の規模や建物構造が明らかになり、銅版画に示される茶所を裏付ける成果となった。

また、2つの柵を検出した。茶所の礎石掘形を切り込んで成立するため、時期は近代以降のものではあるが、参道縁石と並行する区画施設と考えられる。

以上、今回の調査成果をまとめたが、東寺境内のうち食堂北東部という比較的中心部における平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代、明治時代の変遷が明らかになったと考える。特にカマドの検出は、東寺境内においては初めての検出であった。その性格については今後の発掘調査に期待したい。

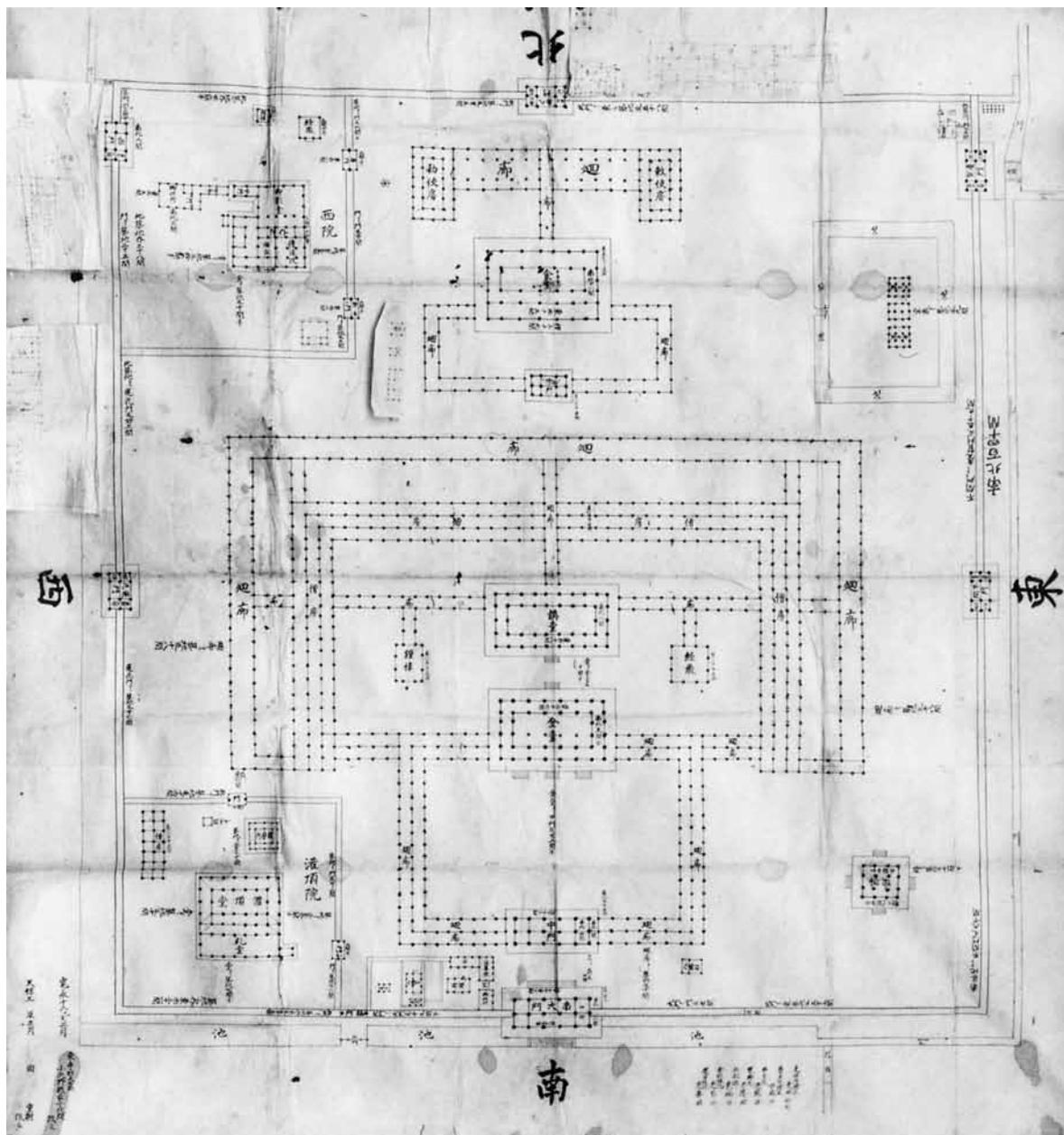


図19 「東寺境内図」(江戸時代)
『東寺の建造物－古建築からのメッセージ』 東寺(教王護国寺)宝物館 1995年 より転載

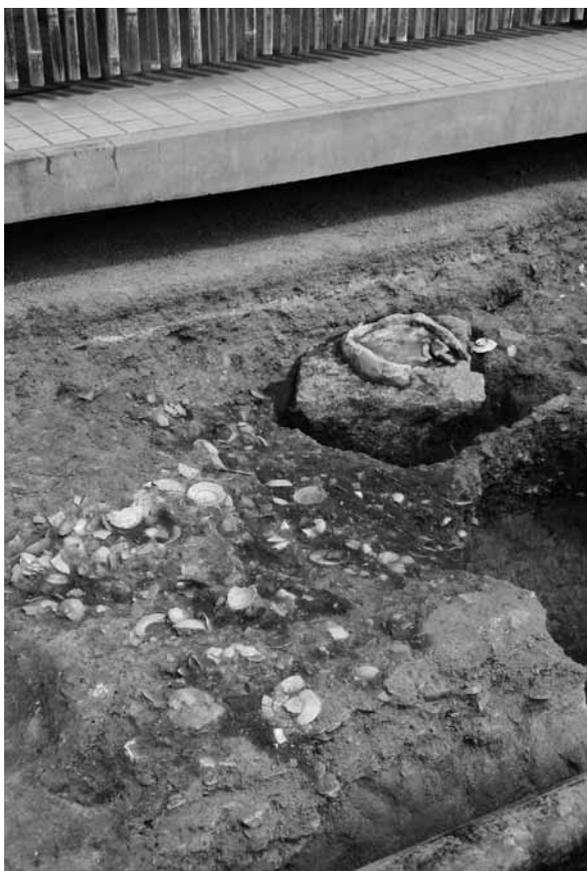


図20 「東寺境内一覽圖」(明治28年)
『東寺の建造物－古建築からのメッセージ』 東寺(教王護国寺)宝物館 1995年 より転載

圖 版



1 第1面全景（南西から）



2 土坑26遺物出土状況（南西から）



3 石列124、暗渠134検出状況（北西から）



1 第2面全景（西から）



2 カマド75検出状況（北西から）



1 カマド75断面状況（北西から）



2 カマド75焚口掘り下げ状況（北東から）



1 前庭部74上面検出状況（北東から）



2 前庭部74下層断割状況（南から）



3 カマド75、前庭部74検出状況（南から）



1 第3面全景（南東から）



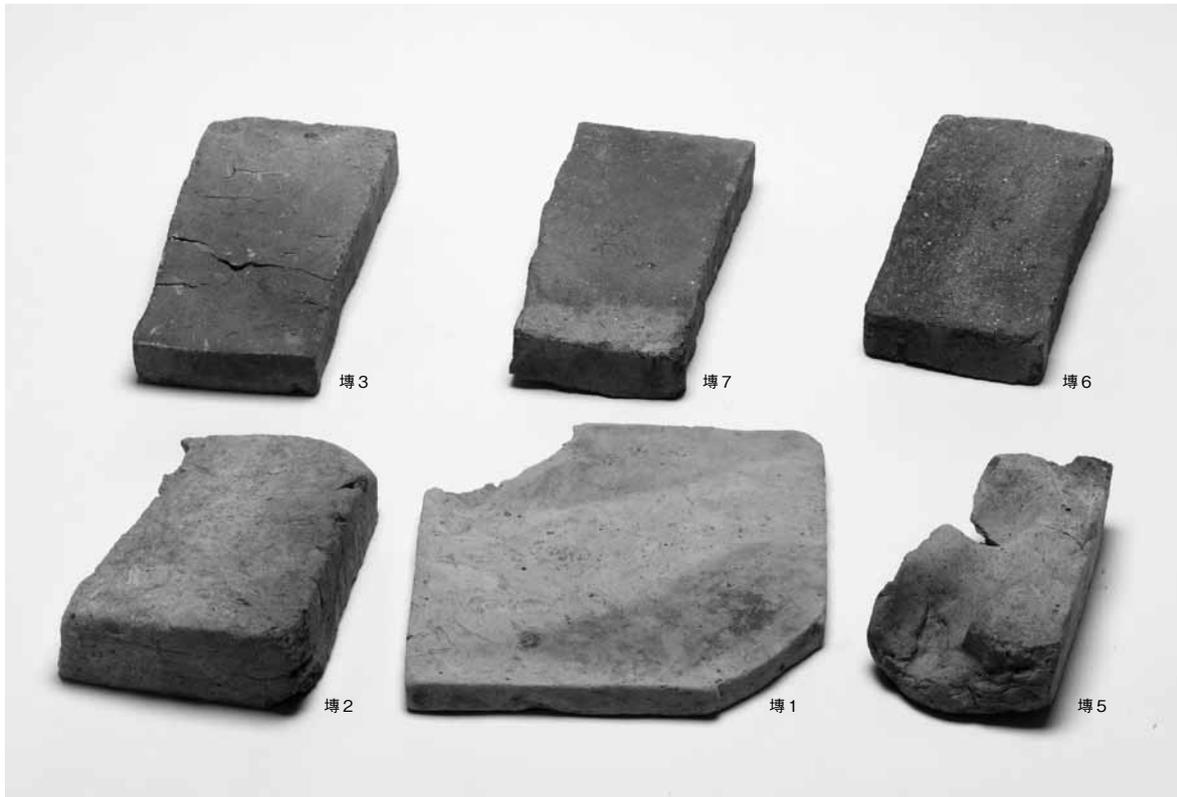
2 溝114完掘状況（南東から）



土坑26出土土器類



軒丸瓦



軒平瓦・瓦搏

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせき きょうおうごこくじけいだい・へいあんきょうあと							
書名	史跡 教王護国寺境内・平安京跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2016-9							
編著者名	山下大輝							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2017年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせき 史跡 きょうおうごこくじけいだい 教王護国寺境内 へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとし 京都市南区 九条町1番地	26100	A752 1	34度 58分 55秒	135度 44分 53秒	2016年8月 23日～2016 年10月17日	56.6㎡	駐車場ト イレ改修 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡 教王護国寺境内 平安京跡	史跡 都城跡	平安時代	溝、築地基底部	土師器、瓦器、瓦類		平安時代後期の北 築地塀に伴う溝を 検出した。 中世のカマドとそ の前庭部、土坑・ 柱穴を検出した。 近世の参道縁石・ 路面など、明治時 代の茶所の礎石建 物を検出した。		
		鎌倉時代 ～室町時代	カマド、前庭部、 柱穴、土坑	土師器、須恵器、瓦器、 瓦類、瓦埴				
		江戸時代 ～近代	礎石建物、井戸、 タタキ、石列、暗 渠、塙、土坑、柵	土師器、焼締陶器、施 釉陶器、染付、瓦類、 煉瓦、ガラス製品、土 製品、石製品、金属製 品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-9
史跡 教王護国寺境内・平安京跡

発行日 2017年3月31日

編集行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961